

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(1)

出水平野地区圃場整備に伴う発掘調査報告書

中 里 遺 跡

1993年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が出水平野地区圃場整備に先立って実施した中里遺跡の発掘調査記録です。

中里遺跡は昭和48年に発掘調査が実施された遺跡です。その結果、多くの土器が出土し、多くの発見がありました。

県教育委員会は平成4年度に出土品の整理・検討を実施してきましたが、ここにその結果を「中里遺跡」として本書を刊行することができました。

本遺跡は県内でも、縄文時代の後期にあたる三万田式土器の単純遺跡として注目されてきた遺跡の一つです。

このことは、九州中・北部で多く発見されている縄文後期の三万田式土器文化が南九州にも存在することを証明したことになり、学術研究においても貴重な遺跡と言えます。

県教育委員会としては、縄文時代の生活文化を提供するこの報告書が、文化財の保護と学術研究のために広く活用されることを願っています。

発刊にあたり、発掘調査及び報告書作成に御指導並びに御協力をいただきました関係各位に心から感謝の意を表します。

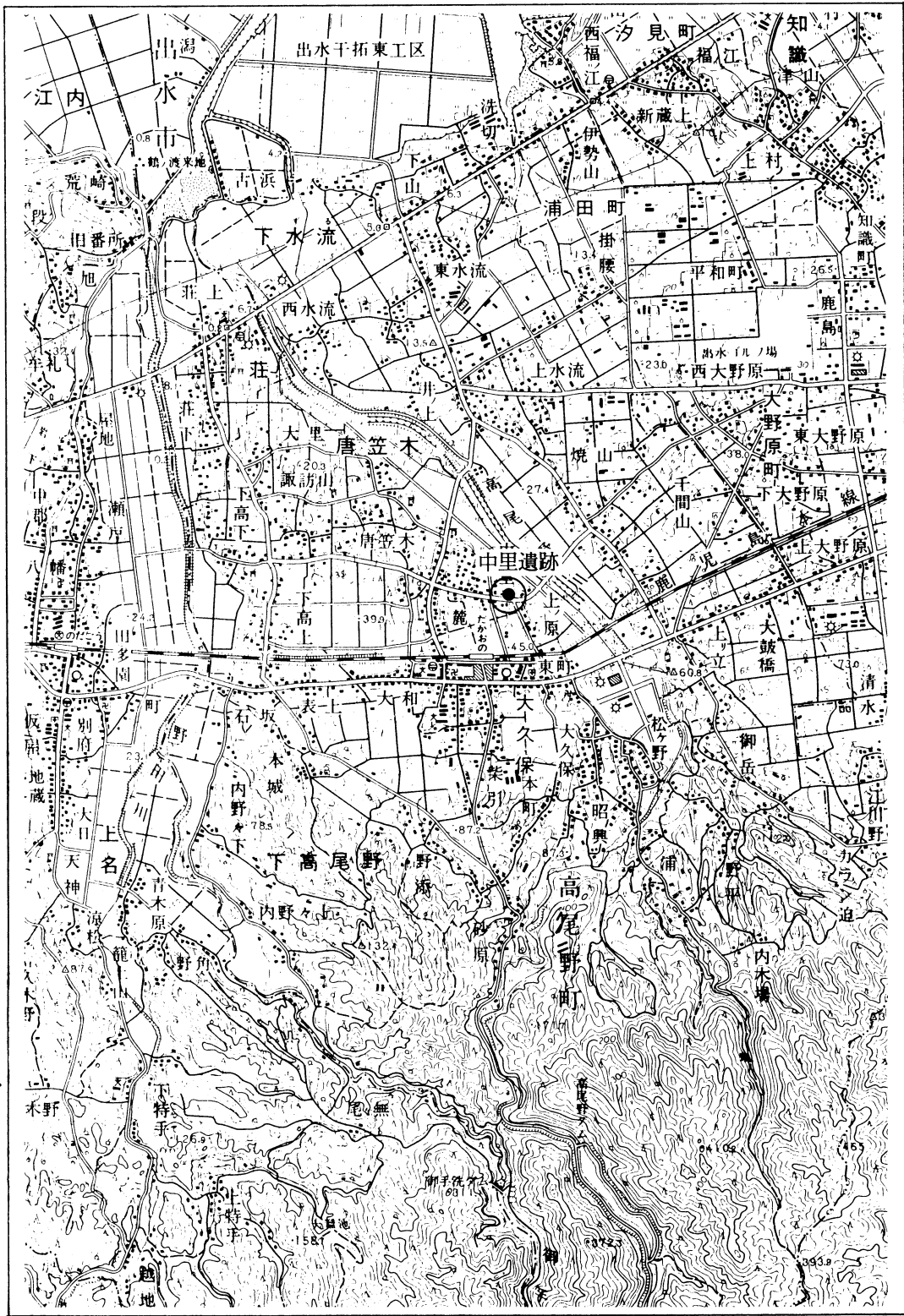
平成5年3月

鹿児島県埋蔵文化財センター

所 長 大久保 忠 昭

報 告 書 抄 録

フリガナ	ナカザトイセキ				
書名	中里遺跡				
副書名	出水平野地区圃場整備に伴う発掘調査報告書				
巻次	1				
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書				
シリーズ番号	1				
編著者名	弥栄久志				
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター				
所在地	〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252				
発行年月日	1993年3月31日				
フリガナ	ナカザトイセキ				
所収遺跡名	中里遺跡				
所在地	鹿児島県出水郡高尾野町柴引中里				
調査期間	1974. 2. 11～3. 4				
調査面積	204㎡				
調査原因	出水平野地区圃場整備事業				
	主な時代	主な遺構	主な遺物	出土量	特記
出土遺物・遺構等	縄文時代		早期（押型文土器） 後期（三万田式） （御領式） 前期	パンケース 5箱	
	弥生時代 古墳時代 近世				



例 言

- 1 この報告書は、出水平野地区圃場整備事業に伴う中里遺跡の発掘調査報告書である。
 - 2 この報告書は、県立埋蔵文化財センターが主体となり、報告書作成事業によって実施した成果品である。
 - 3 遺物指導・助言は、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏に依頼した。
 - 4 本書の執筆は弥栄があたった。
 - 5 本書で用いた遺物番号は、通し番号とし、挿図番号と図版番号は一致する。
-

目 次

序 文	
例 言	
第 I 章 発掘調査と報告書作成	1
第 1 節 発掘調査に至るまでの経過と報告書作成事業の実施	1
第 2 節 発掘調査の組織	1
第 II 章 遺跡の立地と周辺調査	2
第 1 節 遺跡の立地と環境	2
第 2 節 遺跡と周辺遺跡	2
第 III 章 調査の概要	7
第 1 節 発掘調査	7
1 第 1 次調査	7
2 第 2 次調査	7
第 2 節 出土遺物	9
1 第 I 類－縄文早期	9
2 第 II 類－縄文後期	9
(1) 浅 鉢	9
(2) 深 鉢	11
3 第 III 類－縄文晩期	33
4 第 IV 類－弥生前期	33
5 第 V 類－古墳時代	33
6 第 VI 類－近世	33
第 IV 章 まとめ	35
図 版	37

挿 図 目 次

第1図	中里遺跡と周辺遺跡	3
第2図	現在の遺跡付近	4
第3図	土層模式図	7
第4図	トレンチ配置図	8
第5図	5トレンチの拡張図	8
第6図	第Ⅱ類(1) - 浅鉢1	10
第7図	第Ⅱ類(2) - 浅鉢2	12
第8図	第Ⅱ類(3) - 浅鉢3	13
第9図	第Ⅱ類(4) - 浅鉢4	14
第10図	第Ⅱ類(5) - 深鉢1	16
第11図	第Ⅱ類(6) - 深鉢2	17
第12図	第Ⅱ類(7) - 深鉢3	18
第13図	第Ⅱ類(8) - 深鉢4	19
第14図	第Ⅱ類(9) - 深鉢5	20
第15図	第Ⅱ類(10) - 深鉢6	21
第16図	第Ⅱ類(11) - 深鉢7	24
第17図	第Ⅱ類(12) - 深鉢8	25
第18図	第Ⅱ類(13) - 深鉢9	26
第19図	第Ⅱ類(14) - 深鉢10	27
第20図	第Ⅱ類(15) - 深鉢11	28
第21図	第Ⅱ類(16) - 深鉢12	29
第22図	第Ⅱ類(17) - 深鉢13	30
第23図	第Ⅱ類(18) - 底部1	31
第24図	第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類の土器と陶器	34

表 目 次

第 1 表 中里遺跡と周辺遺跡 1	2
中里遺跡と周辺遺跡 2	5
中里遺跡と周辺遺跡 3	6

図 版 目 次

図 版 1	37
図 版 2	38
図 版 3	39
図 版 4	40
図 版 5	41
図 版 6	42
図 版 7	43
図 版 8	44

第Ⅰ章 発掘調査と報告書作成

第1節 発掘調査に至るまでの経過と報告書作成事業の実施

鹿児島県農政部は出水平野地区の圃場整備を実施するにあたり、出水郡高尾野町柴引中里に遺跡が存在するため県文化課に調査を依頼した。

県文化課はそれを受けて昭和49年2月11日(月)から3月4日(火)まで発掘調査を実施した。

県教育委員会は、いままで発掘調査された遺跡の中で、未報告のものを報告書作成事業として年度ごとに平成2年度から実施している。

平成2年度は「鹿児島城二ノ丸跡（遺構編）」、平成3年度は「鹿児島城二ノ丸跡（遺物編）」を実施した。

この事業は、前年度までが県教育庁文化課で実施されてきたが、県立埋蔵文化財センター発足に伴い、同センターが実施することになった。

そして、今回は3年目で、「中里遺跡」と「九日田遺跡」がこの事業の遺跡にあたる。

第2節 発掘調査の組織

現地調査

事業主体	鹿児島県農政部		
調査主体者	県教育長	鮫島	文男
調査責任者	文化課長	犀川	碓吉
調査企画	課長補佐	盛園	尚孝
調査担当	文化財研究員	諏訪昭千代	
	主 事	新東	晃一
	文化財調査員	弥栄	久志
	同	青崎	和憲
事務担当	主 事	牛留	雅夫

整理作業

報告書作成事業主体者	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化課	
報告書作成事業責任者	県立埋蔵文化財センター所長	大久保忠昭
報告書作成事業企画者	県立埋蔵文化財センター次長兼総務課長	水口 俊雄
	同 県立埋蔵文化財センター主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
報告書作成担当	県立埋蔵文化財センター調査課文化財主事	弥栄 久志
事務担当	県立埋蔵文化財センター総務課主査	下園 勝一
	県立埋蔵文化財センター総務課主事	中村 和代
遺物指導・助言者	鹿児島県文化財保護審議会委員	河口 貞徳

第Ⅱ章 遺跡の立地と周辺遺跡

第1節 遺跡の立地と環境

遺跡は鹿児島県出水郡高尾野町柴引中里に所在している。

高尾野町は鹿児島県の東北部に位置し、地形は南に1067mの紫尾山を最高峰とする出水山地からの北に傾斜した扇状地で、北側に八代海を望む。

行政区画としては、高尾野町の東側に出水市、西側に野田町、南側に宮之城町があり、出水郡の中央部に位置している。

遺跡の位置は、高尾野町の中央部で、J R 高尾野駅の約500m北側付近で、中里集落の東側にあたる。

遺跡の地形は、高尾野川の右岸の台地で、その段丘は北側にむいた標高約40mの河岸段丘である。

遺跡のすぐ南の約100mには、地下式板式古墳群の堂前古墳群が所在する。

第2節 遺跡と周辺遺跡

堂前古墳群（第1図2）は昭和45年等に故池水寛治氏が2回にわたり、発掘調査を実施している。古墳群の種類としては、地下式板式古墳群をはじめ、覆石土壙が39基、ピットが3基確認されている。

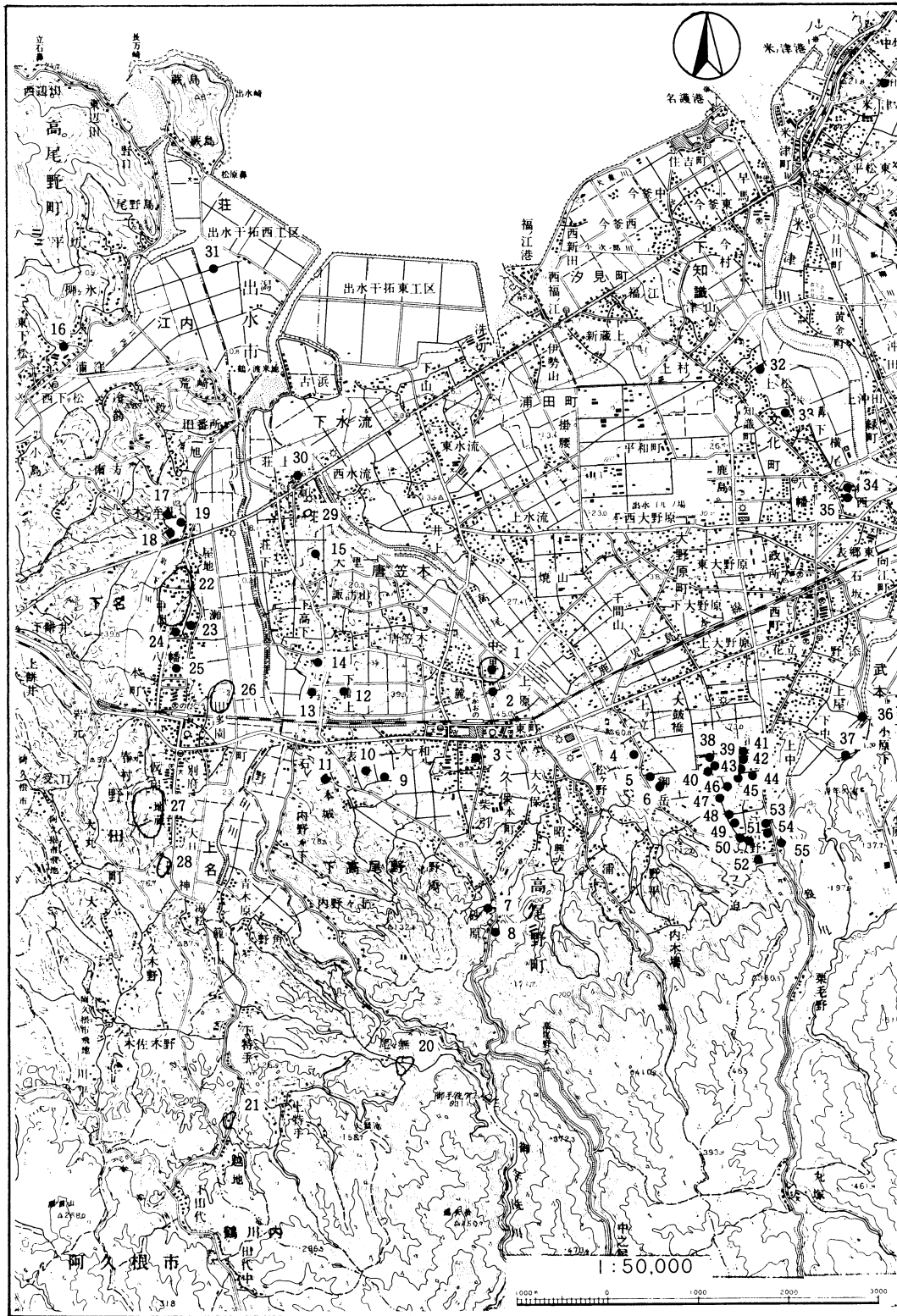
このほか周辺には、町内には同じ事業で報告する柿内遺跡（第1図5）や江内貝塚（同16）そして、東隣の出水市の出水貝塚（同34）、荘貝塚（同30）等、縄文時代の貝塚や遺跡が多く発見されている。

第1図と第1表は各遺跡と内容である。

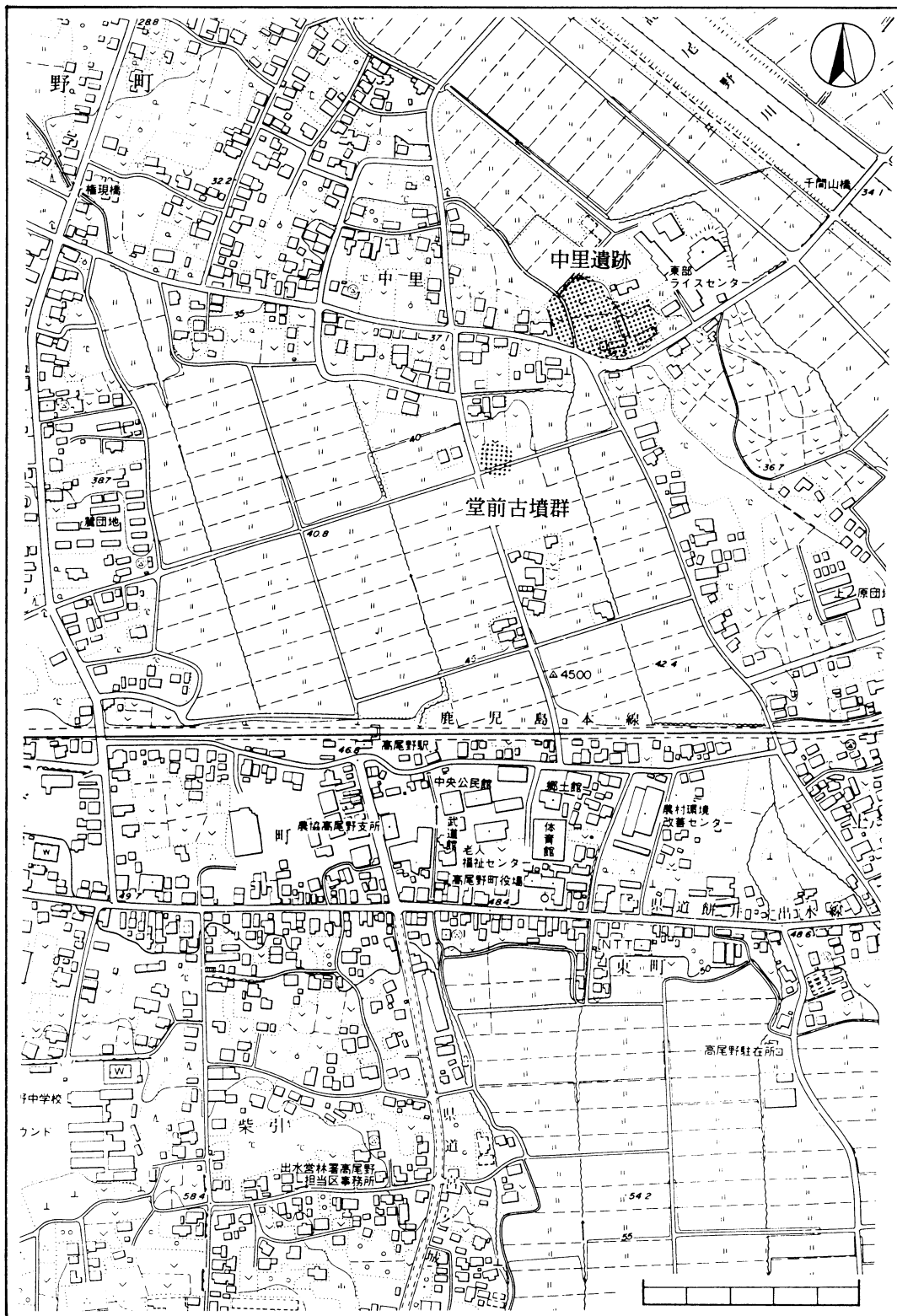
第1表 中里遺跡の位置と周辺遺跡

(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	中里	高尾野町柴引中里	平地	縄早・後・晩・弥前・古墳	埴壇・三田・黽・亀/甲	昭49発掘
2	堂前古墳	同 同 堂前	平地	古墳	地下式板石積石室	昭45発掘
3	柴引	同 同	平地	弥生後期	弥生式土器片	
4	御岳	同 大久保御岳	平地			
5	柿内	同 同 柿内	平地	縄中・後	土器・石器	昭50発掘
6	大久保遺跡	同 大久保	平地			
7	高尾野城跡	同 下高尾野内城	山地	中世	山城	畑地
8	東敬寺跡	同 柴引砂原	丘陵	中世	磨崖仏	出水風土記
9	柴引遺跡群	同 柴引	平地			
10	野添	同 同 野添	平地			
11	本城跡	同 下高尾野高城	山地	中世	山城	



第1図 中里遺跡と周辺遺跡



第2図 現在の遺跡附近

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
12	下高尾野遺跡群	高尾野町下高尾野	平地	不明		
13	新城跡	同 下高尾野新城	山地	中世		
14	放光寺跡	同 下高尾野	平地	中世		昭50発掘
15	下高尾野	同 下高尾野	平地	不明		
16	江内貝塚	同 江内外畑	平地	縄前・中・後	並木・阿高・南福寺・出水式・春日・鐘ヶ崎式・石斧・石棒・石鏃人骨	昭 発掘
17	竹林城跡	同 同木牟礼	山地	中世		
18	木牟礼	同 同	台地	弥後	土器片	
19	木牟礼城跡	同 同尾崎	台地	中世		島津忠久の居城
20	尾ヶ無城	野田町上名山城	山地	中世	帶曲輪・井戸	
21	起地城	同 同城ヶ迫	丘陵	中世	空堀	
22	木牟礼城敷跡	同 下名屋地	丘陵	中世	土塁	
23	中郡	同 中郡	台地	弥後	土器片	
24	山内寺跡	同 中郡	台地	中世		建久7年
25	感応寺跡	同 八幡	台地	中世		鎌倉時代建立
26	野田畠	同 野田畠	丘陵	縄文～中世	土器・石器・土師・須恵器	
27	亀井城跡	同 上名本城	丘陵	中世		保元平治期
28	新城	同 新城	丘陵	中世	空堀・土塁・帶曲輪	
29	荘上	出水市荘 荘上	平地	中世	土師器・青磁	昭49発掘
30	荘貝塚	同 同	平地	縄文前期	轟式・石斧・石鏃・石匙	昭48発掘
31	鹿児島県のソル及びその渡来地	出水市・高尾野町野田町	干拓		特別天然記念物	国指定昭27.3.29
32	谷城跡	出水市上鯖淵井之上	山地	中世		
33	溝下古墳	同 溝下	平地	古墳	地下式板石積石室群	昭45発掘
34	出水貝塚崎	同 上知識尾	平地	縄早・中・後	押型文・並木・阿高・南福寺・出水・鐘ヶ崎式土器片・貝輪・玉製品・人骨	京都大報6 県文化財報告5
35	尾崎貝塚	同 同	平地	不明		知識城
36	安原	同 下知識安原	台地	弥生	土器	
37	平山城跡	同 武本上中	山地	中世		伴条和泉氏一族の居城
38	出水池下Ⅱ	同 武本池下	台地	不明		

番号	遺跡名	所在	地形	時代	遺物等	備考
39	花園Ⅰ	出水市武本花園	台地	不明		
40	出水池下Ⅱ	同 池下	台地	〃		
41	花園Ⅱ	同 花園	台地	〃		
42	楠元西	同 楠元	台地	〃		
43	楠元Ⅱ	同 同	台地	〃		
44	上宮上	同 上宮上	台地	〃		
45	楠元Ⅰ	同 楠元	台地	〃		
46	楠元上	同 楠元上	台地	〃		
47	出水池南	同 出水池南	台地	〃		
48	池ノ尾下	同 池ノ尾下	台地	〃		
49	池ノ尾	同 池ノ尾	台地	〃		
50	池ノ東	同 池ノ東	台地	〃		
51	上池ノ尾	同 上池ノ尾	台地	〃		
52	西小野	同 西小野	台地	〃		
53	中尾Ⅱ	同 中尾	台地	〃		
54	中尾Ⅰ	同 中尾	台地	〃		
55	下小野	同 下小野	台地	〃		

以上が周辺の遺跡である。

この地域は、北斜面の扇状地に見られる遺跡群である。これらの遺跡群は、山地・丘陵・平地とどこでも遺跡が見られ、干拓以前の海岸線には縄文時代の貝塚が見られる。

また、中世の城館が多いのにも特徴がある。それは、鎌倉武士の島津氏の最初の勢力地域であった所であるので、そのことが伺えられる。

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 発掘調査

1. 第1次調査

発掘調査は町道中里線の三文字から北側に40×2 mのトレンチを設定し、これを第1トレンチとした。遺物の出土はなかった。土層としては表層の下は、混土砂利層であった。

第2トレンチから第7トレンチまでは5×2 mのトレンチを中央部に設定し、第4トレンチに数点出土した。他のトレンチは遺物の出土はなかった。

第8トレンチ及び第9トレンチは10×2 mのトレンチで、遺跡の東部に設定して調査した。その結果、表層の下は混土砂利層であり、遺物の出土はなかった。

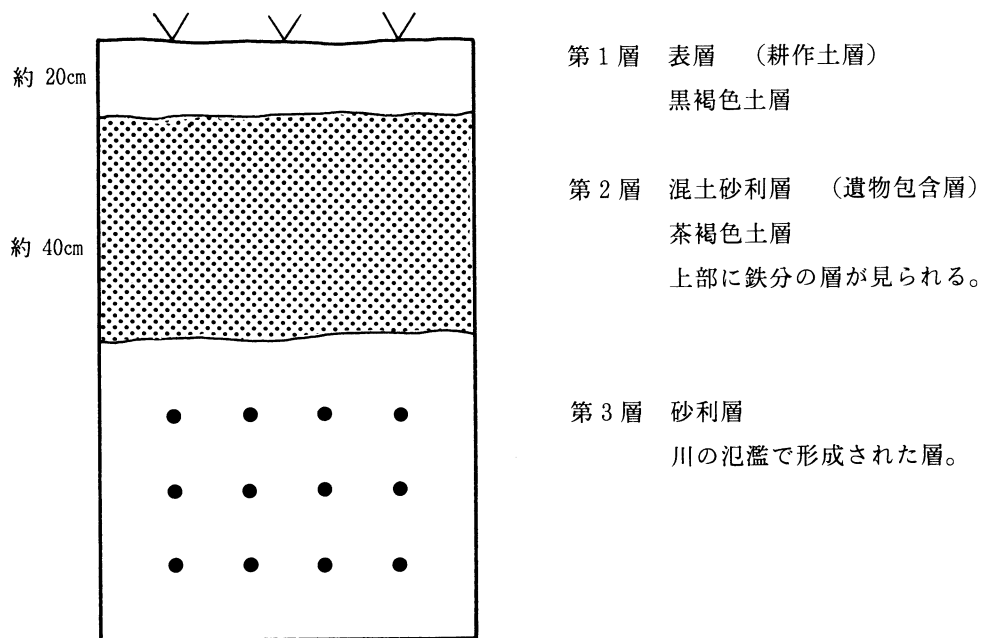
2. 第2次調査

第4トレンチを拡張し、最終的には10×8 mの範囲を調査した。

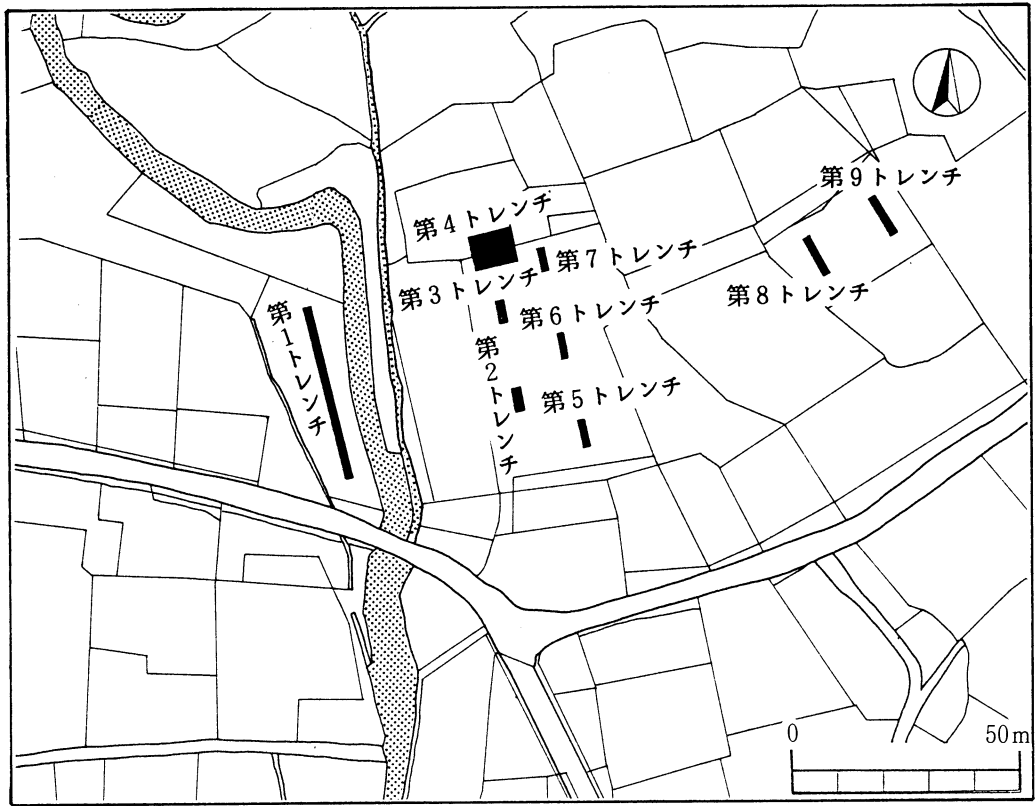
このトレンチは河岸段丘の段の部分で、2枚の畑にかかっている。

出土状態は、上の畑から下の畑の斜面地に出土し、G区に多く出土した。第4図はそのトレンチである。

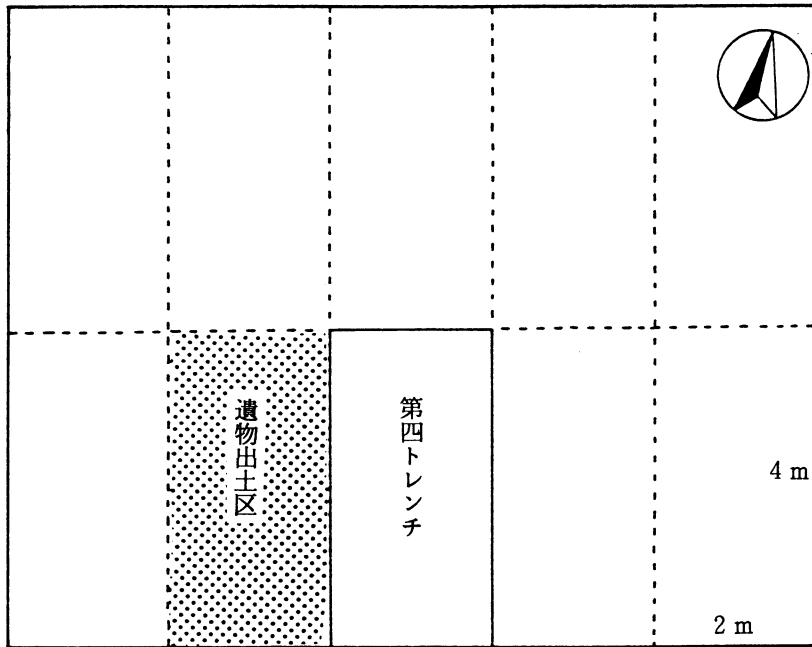
土層は第1層が黒褐色土層で現耕作土層、第2層が茶褐色土層で混土砂利層、第3層が砂利層である。第3図がその模式図である。



第3図 土層模式図



第4図 トレンチ配置図



第5図 第4トレンチの拡張

第2節 出土遺物

遺物は縄文早期・後期・晩期、弥生前期、古墳、近世の土器片及び陶器片が出土している。

1. 第Ⅰ類－縄文早期 (116)

第24図の116の土器である。器形は深鉢で、文様は楕円押型文である。色調は外面が茶褐色で、内面が黒茶褐色である。焼成はもろく、胎土には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

2. 第Ⅱ類－縄文後期 (1～115)

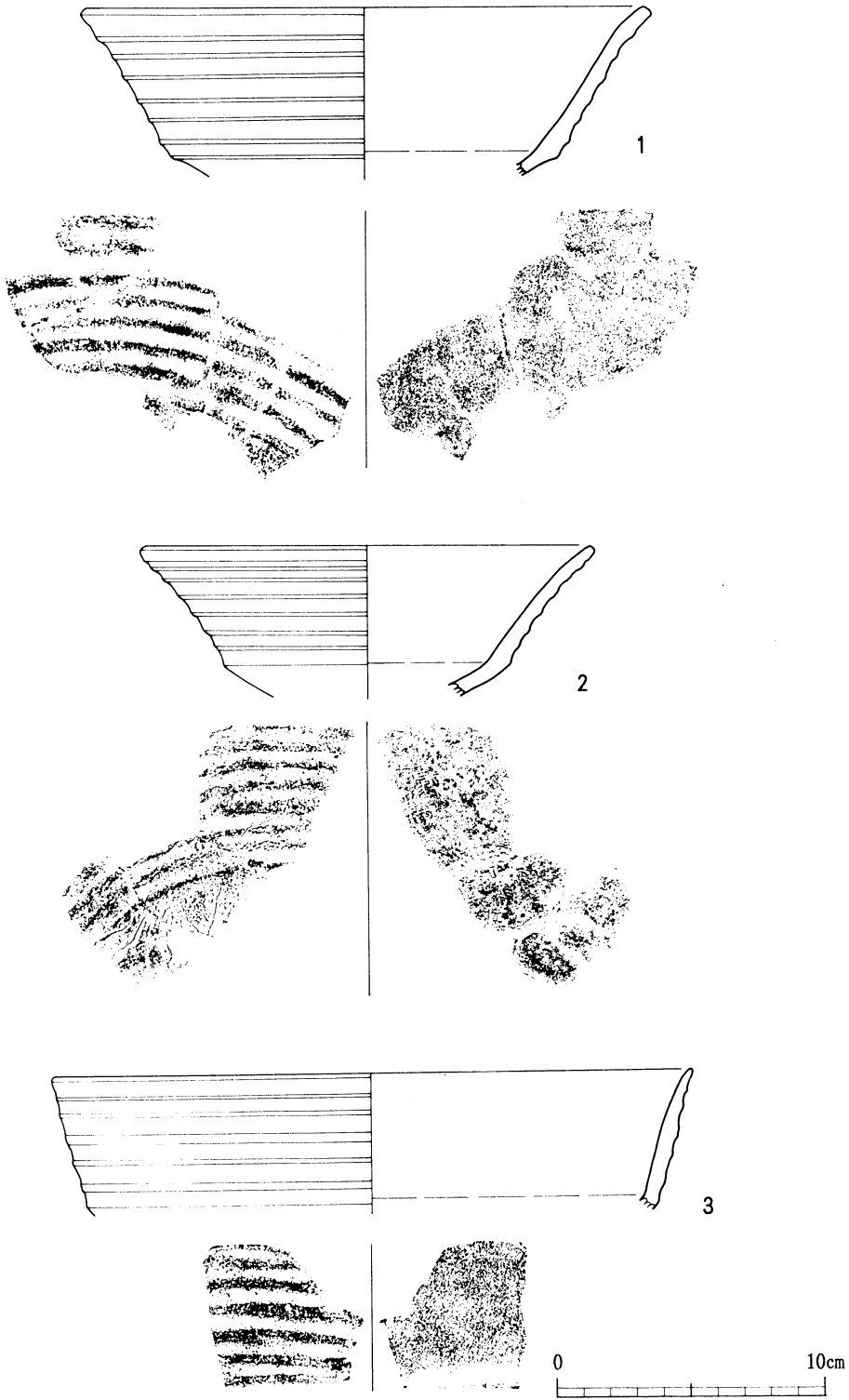
この類の土器を大別すると、浅鉢と深鉢に分けられる。

(1) 浅鉢 (1～17)

1～5は同じ型の薄手の土器である。1は7条の凹線文を外面に施す。器形は口縁部がラップ状に開き、胴部で「く」字状に屈折している。器面は研磨痕があり、丁寧な仕上げである。色調は暗茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。2は1を若干小さくしたもので、7条の凹線文を外面に施す。器形は口縁部がラップ状に開き、胴部で「く」字状に屈折している。器面は研磨痕があり、丁寧な仕上げである。色調は茶褐色である。胎土は茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。3は6条の凹線文を外面に施す。器形は口縁部がラップ状に開き、胴部で「く」字状に屈折している。器面には研磨痕があり、丁寧な仕上げである。色調は茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。4は数条の凹線文を外面に施す。器形は口縁部がラップ状に開き、胴部で「く」字状に屈折している。器面は研磨痕があり、丁寧な仕上げである。色調は茶褐色である。胎土は暗茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。5は数条の凹線文を外面に施す。器形は口縁部がラップ状に開き、胴部で「く」字状に屈折している。器面は研磨痕があり、丁寧な仕上げである。色調は茶褐色である。胎土は茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

6～9は口縁がやや立つ凹線文の土器である。6は幅の広い浅い凹線文で、若干外反した口縁部である。器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は灰茶褐色である。胎土は茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。7は幅の広い浅い凹線文で、若干外反した口縁部である。器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は黒茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。8は浅い凹線文で、若干内曲した口縁部である。器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は黒茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。9は幅の広い浅い凹線文で、若干外反した口縁部である。器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は黒茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

10は口縁部と胴部に浅い凹線文を施し、器形は口縁部が外反したボール状をしている。器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。



第6図 第Ⅱ類(1) 浅鉢

11は凸帯から判断して、強引に波状口縁の器形にした。よって、波状にならない可能性も強い。口唇部は玉縁状で内外面に狭い凹線を持っている。突帯は胴部に付け、幅が広く中央に沈線があり、2状に見える。そして、2つの凹点が上下に施されている。器形は外開きのボール状で、直線的に開いている。器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は黒茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

12・13は口縁部が直行する同形の土器である。12は2本の凹線を口縁部に施し、器形は肩部で「く」の字状に折れ、胴部は若干丸みを持っている。器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は黒茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。13は3本の凹線文を口縁部に施し、器形は頸部で若干絞り肩部で「く」の字状に折れている。器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は黒茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。14は口縁部に幅の広い凹線文が2状あり、器形は大きく外反する口縁で、内面で段を持つ。器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

15は口縁部に幅の広い凹線文が2状あり、器形は直行する口縁で、肩部で「く」に折れ、器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

16は口縁部に幅の広い凹線文が3状あり、器形はやや外反する口縁で、肩部で「く」に折れ、器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。肩部は若干垂れ下がる形である。

17は口縁部に幅の広い凹線文が2状あり、器形は口唇で外反する口縁で、肩部で「く」に折れ、器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

18は低い鈍角の波状口縁の土器で、胴部に一本の突帯が巡らされている。その突帯はやや下に向けられて張り付けてある。器形は直線的に外反し、口縁部がやや内側に立っている。外器面は横位に荒く調整し、波状部に2状の沈線を施している。内器面は丁寧な研磨調整で、中ほどに1条の沈線が見られる。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

(2) 深鉢 (19~110)

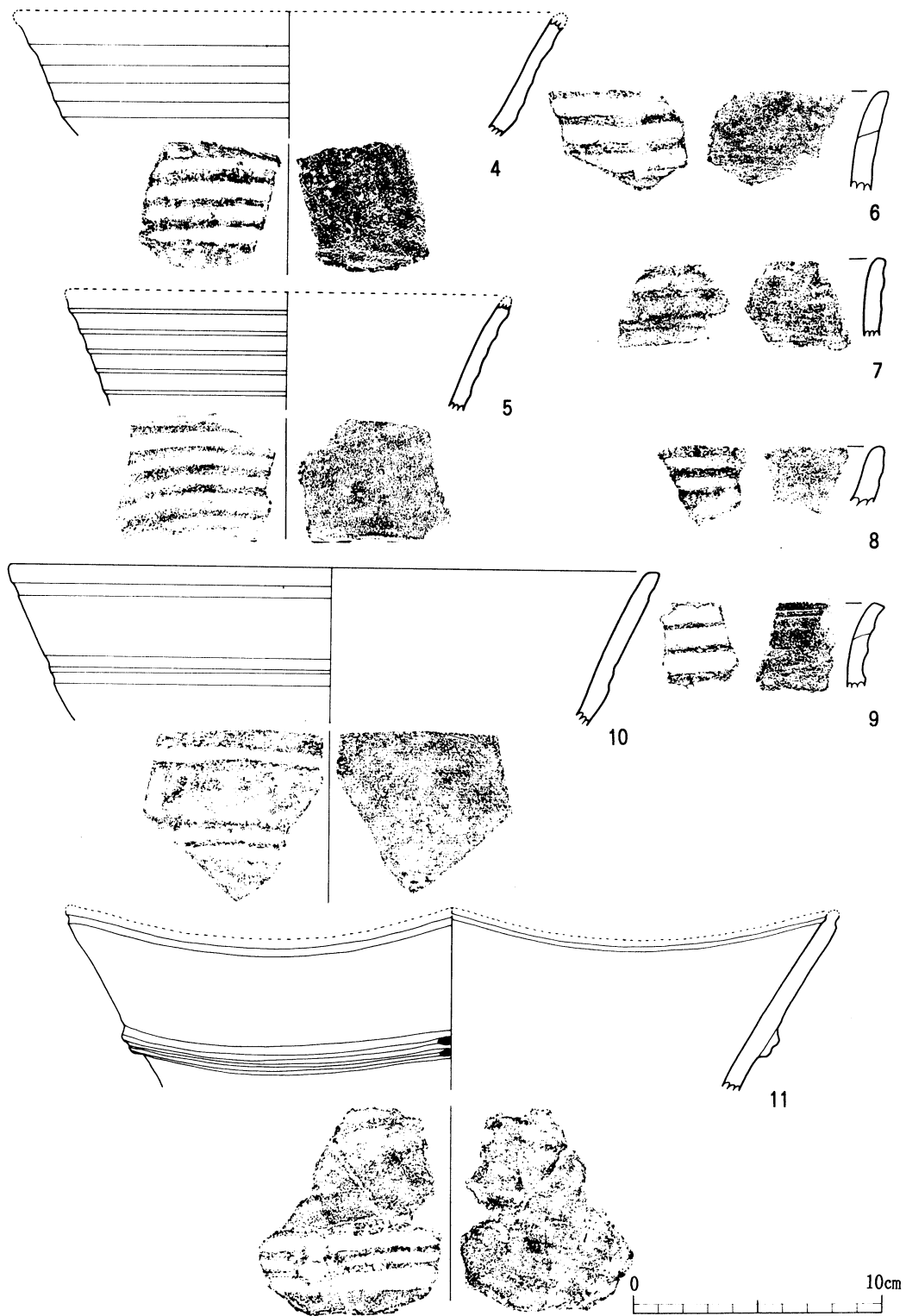
深鉢は口縁部、肩部、胴部等によってA・B・の二つのタイプに分けられる。

① 深鉢A (19・20・21・22・23・24)

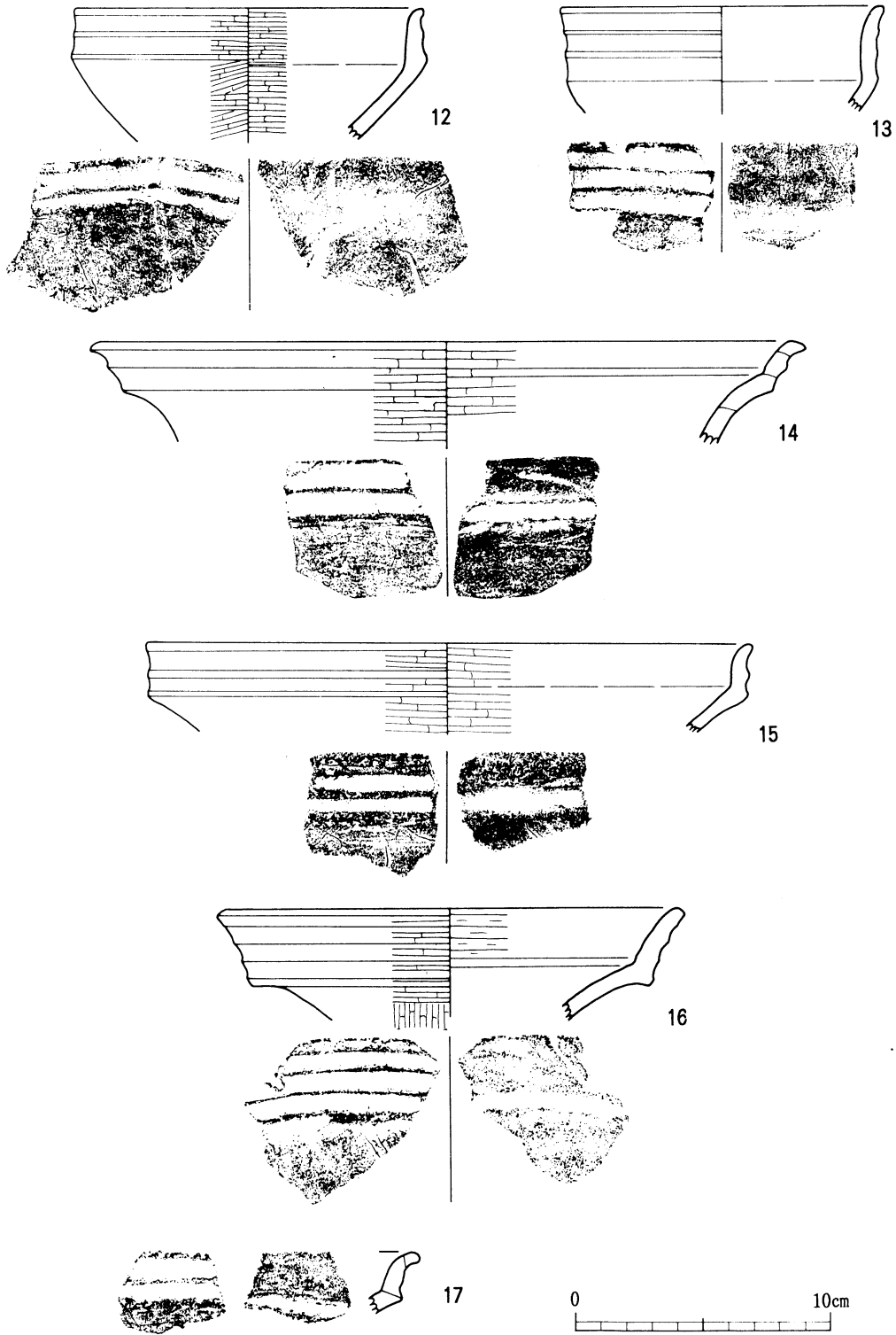
このタイプは口縁部や胴部に幅の広い凹線文を施すもので、有文土器である。

19は3条の幅の広い凹線文を口縁部に施している。器形は内側に傾いた口縁部で、「く」の字状に折れている。器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は明茶褐色である。胎土は茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

20は直行する口縁部で、2条の幅広い凹線文を施している。器形は「く」の字状に折れ、器



第7図 第Ⅱ類(2) 浅鉢2



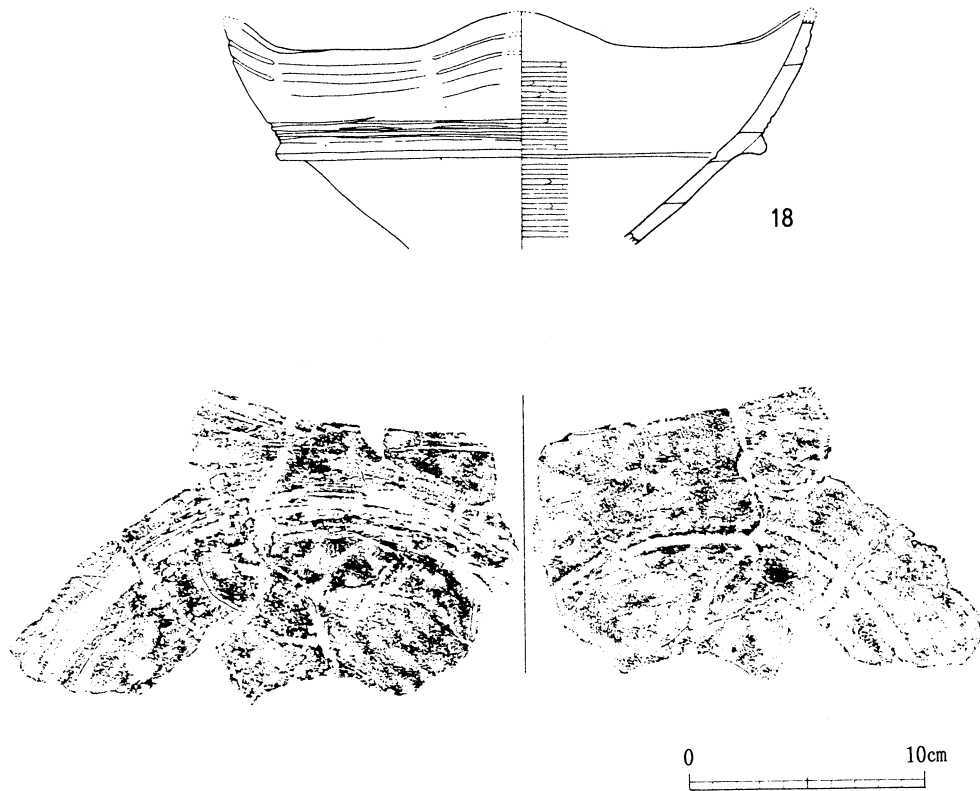
第8図 第Ⅱ類(3) 浅鉢3

面は丁寧な研磨仕上げで、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

21・22は直行する口縁部で、21は3状、22は数状の幅広い凹線文を施している。器面は丁寧な研磨仕上げで、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

23は数状の幅広い凹線文がある丸く湾曲する胴部である。器壁はやや薄手で、器面は研磨の痕跡があるが小さなひび割れがたくさん見られる。色調は暗茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

24は1本の幅広い凹線文がある湾曲する胴部である。この幅広い凹線文は突帯状の厚い器壁の上に施しているため、2本の突帯が巡っているように見える。器形では頸部に向かって内に



第9図 第Ⅱ類(4) 浅鉢4

絞るような傾きをしている。色調は明茶褐色である。胎土は明茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

25～31は口縁部の文様が沈線になっているものである。

25は3状の沈線を持つ土器で、直行する口縁部であるが口唇部で若干内向気味である。器形は頸部で絞るように狭まっている。器面の色調は暗茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

26は2状の沈線を持つ直行する低い口縁部である。器形は頸で絞るように狭まっている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は灰茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

27は4状の沈線を持つやや内行する高い口縁部である。器形は頸部で絞るように狭まっている。器面の色調は明茶褐色で、研磨調整をしている。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

28は2状の沈線を持つやや内行する低い口縁部である。器形は頸部で緩やかに絞るように狭まっている。器面の色調は外側が明茶褐色で、内側が黒褐色であり、研磨調整をしている。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

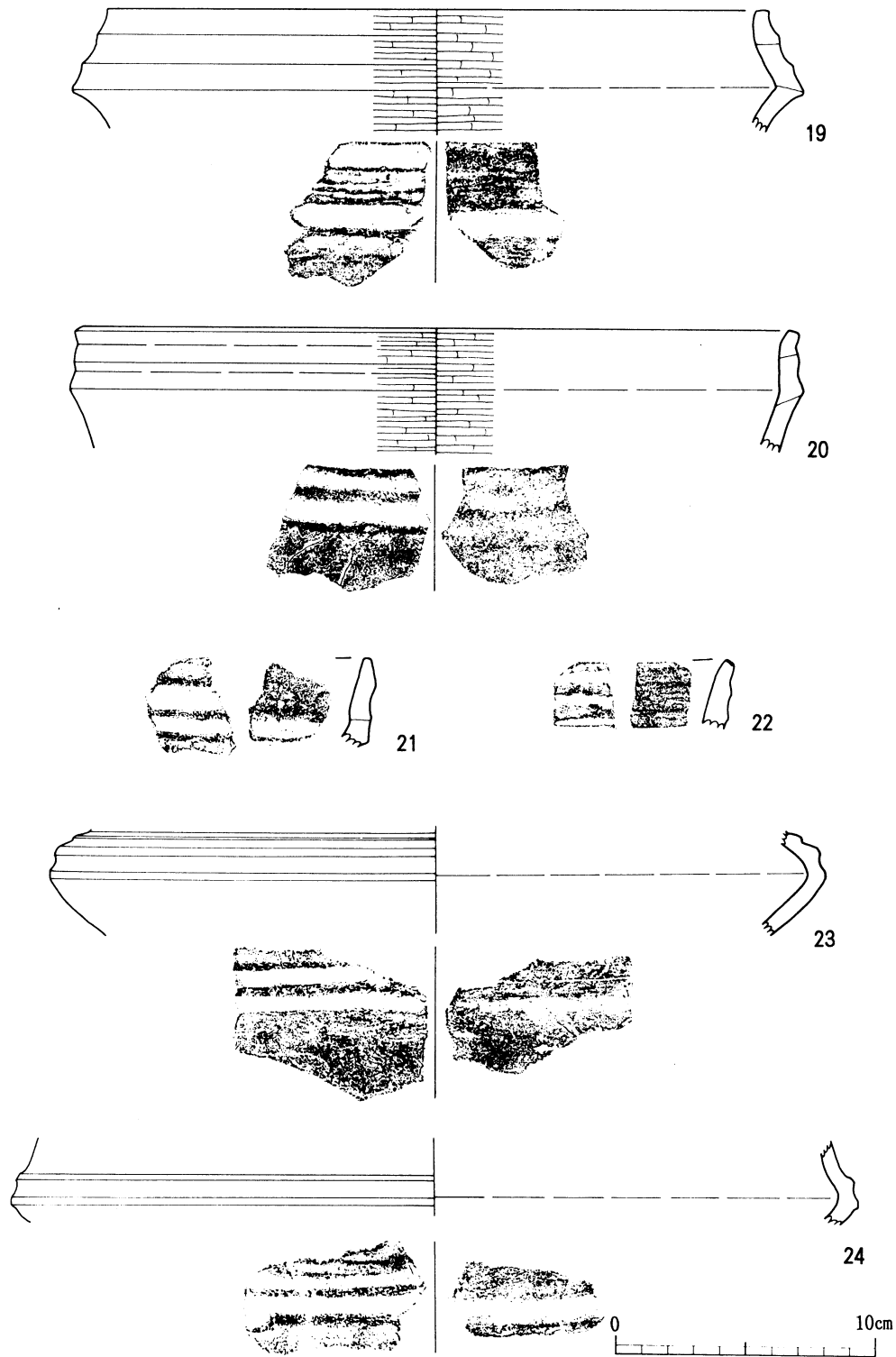
29・30・31は数状に沈線を持つ直行する口縁部である。器面は29・30が茶褐色、31が明茶褐色である。胎土は灰茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

② Bタイプ (32～62・67～80)

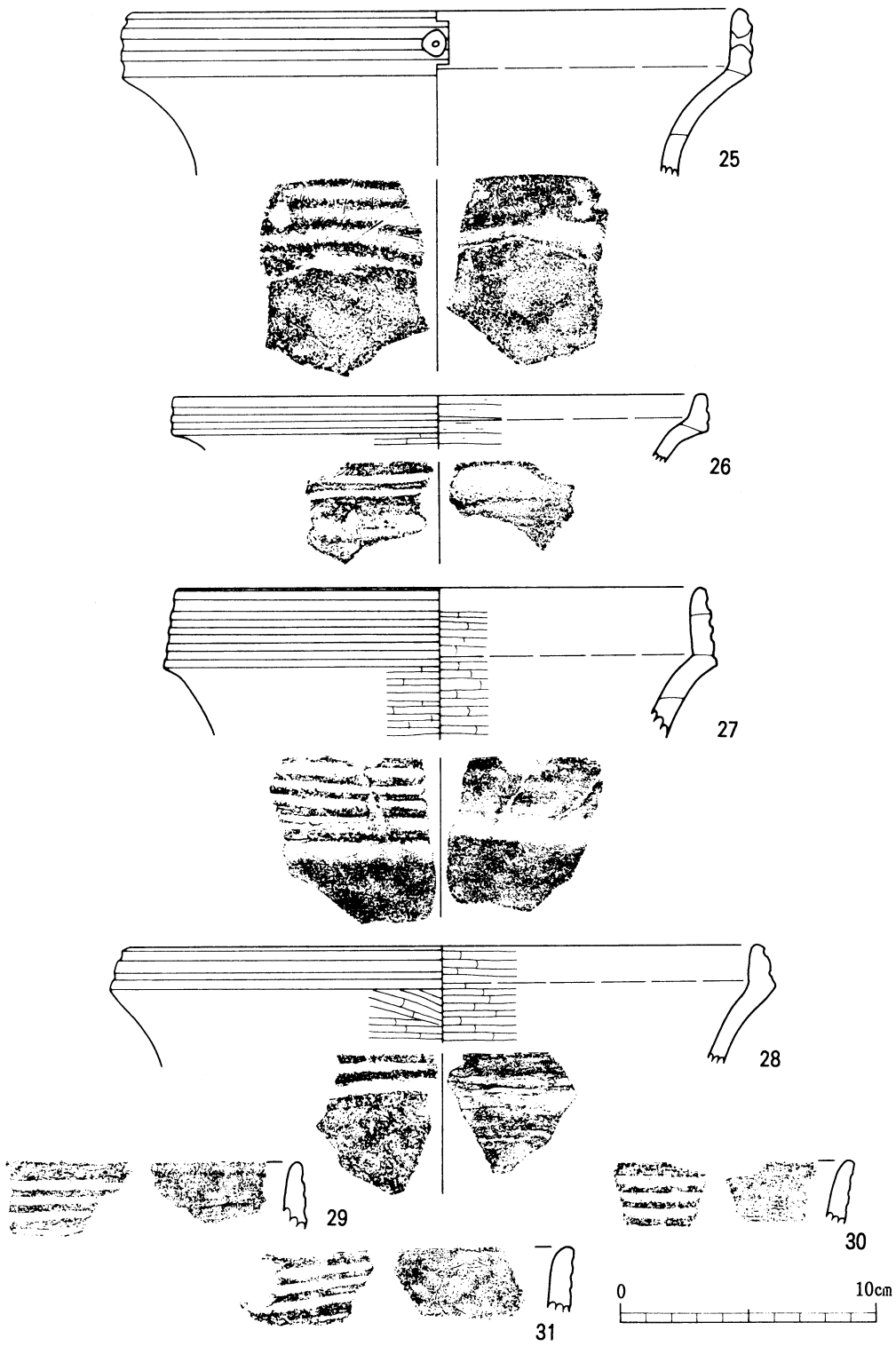
このタイプは口縁部に立上がりがない無文土器である。しかし、肩部には沈線があるものもある。器形としては、肩部が「く」の字状に折れ、頸部で若干絞られ、口縁部が外反するものである。この中でも、a・b・c・dに細分される。

ア B-a (32・33・34・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44・45・46・47・47・48・49・50・51・52)

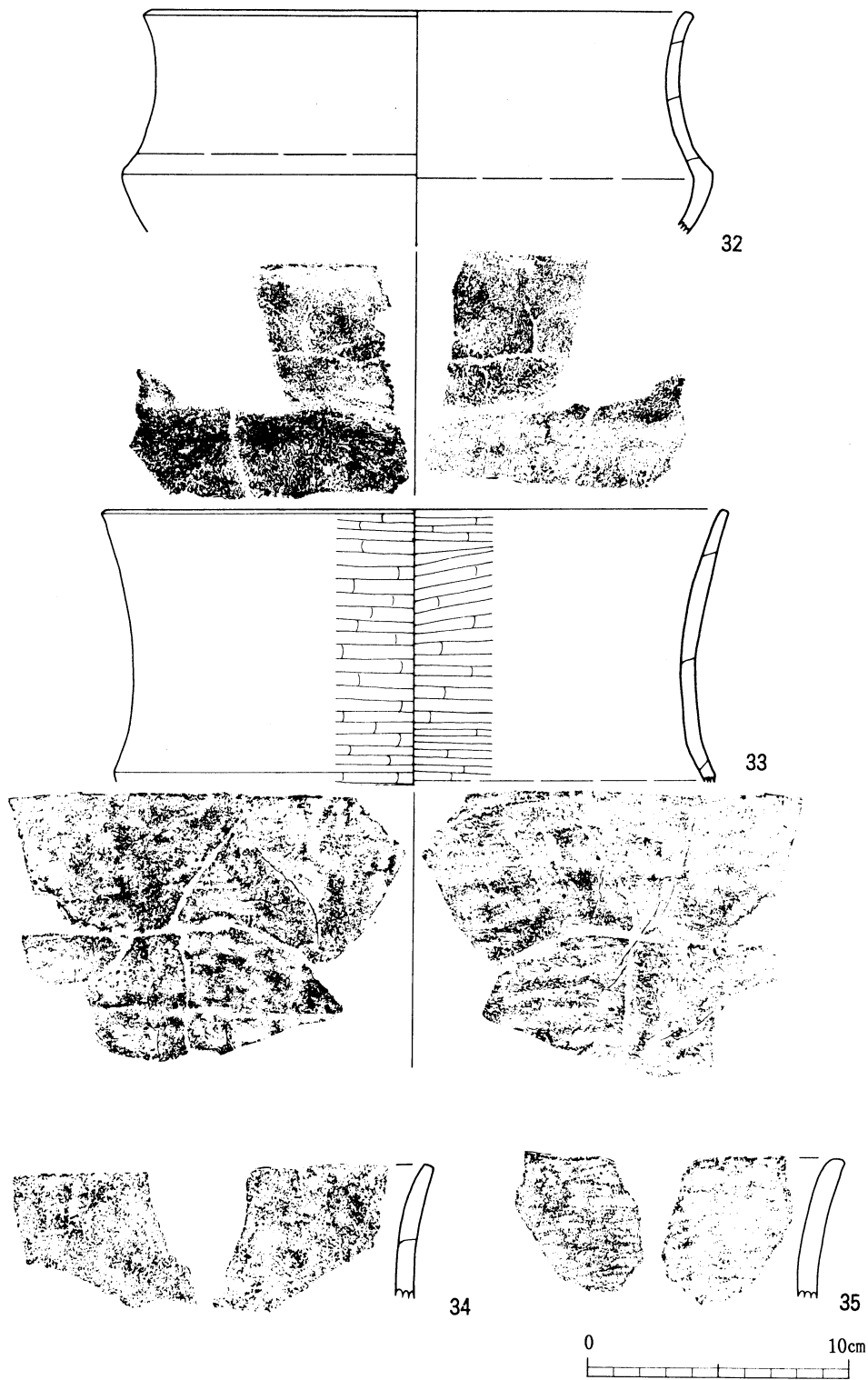
32はやや背の低いもので、口縁の径が肩部の径よりも短い。器面は丁寧な調整であるが、研磨度は弱い。器面の色調は茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。33は肩部から口縁部までのもので、頸部で内側に湾曲し、口縁と肩部の径は差が少ない。器面は荒い研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。34・35は外反する口縁である。器面は34が32に、35は33に類似している。胎土は灰褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。36は外反する土器の口縁部で、器面は荒い研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。37・34は肩部近くから口縁部までのもので、頸部で内側に湾曲している。器面は荒い研磨調整がされ、器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。38・39は外反する口縁部である。器面は研磨調整で、色調は灰褐色である。胎土は灰茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。40は外反する土器の口縁部で、器面は荒い研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・



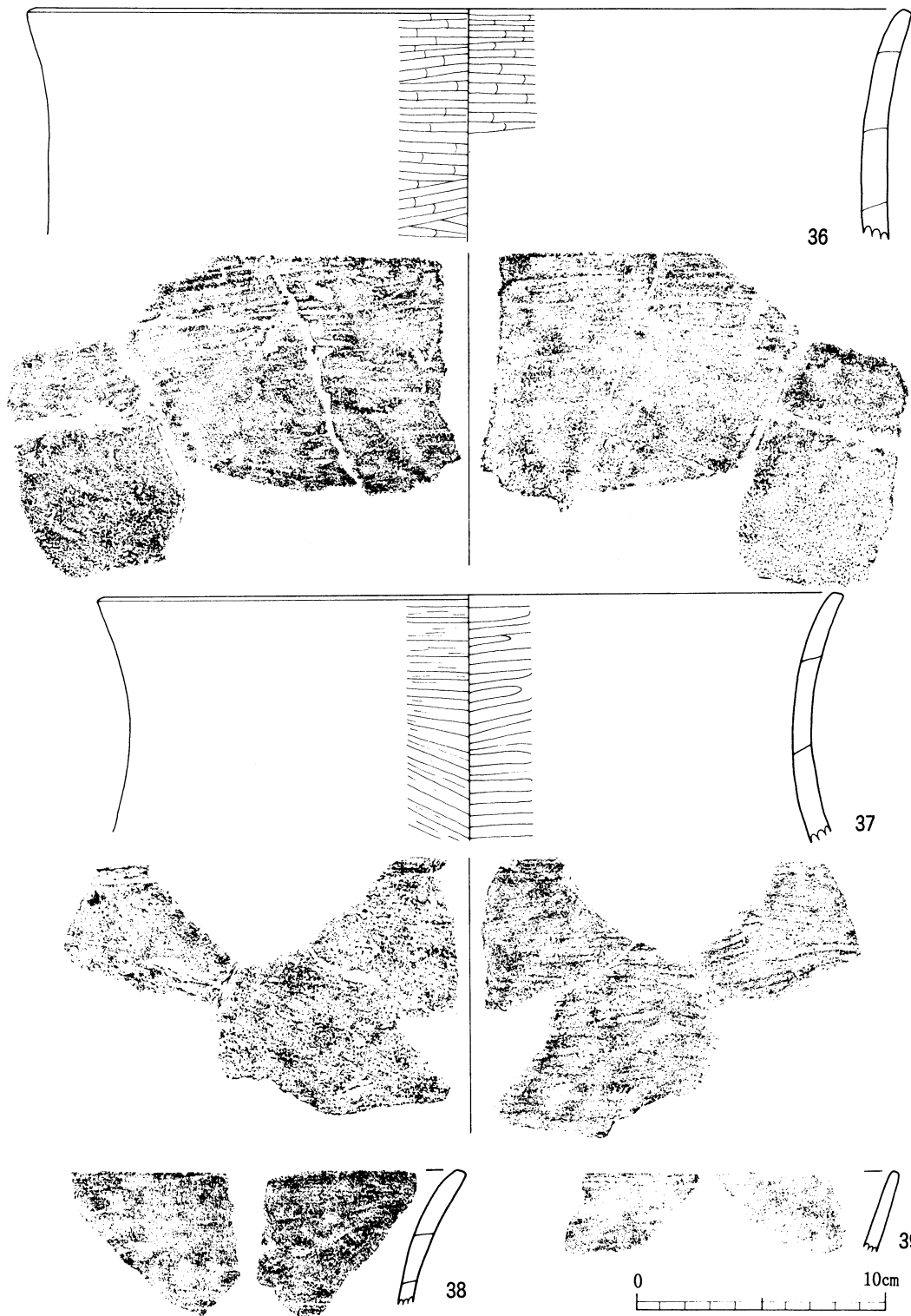
第10図 第Ⅱ類(5) 深鉢1



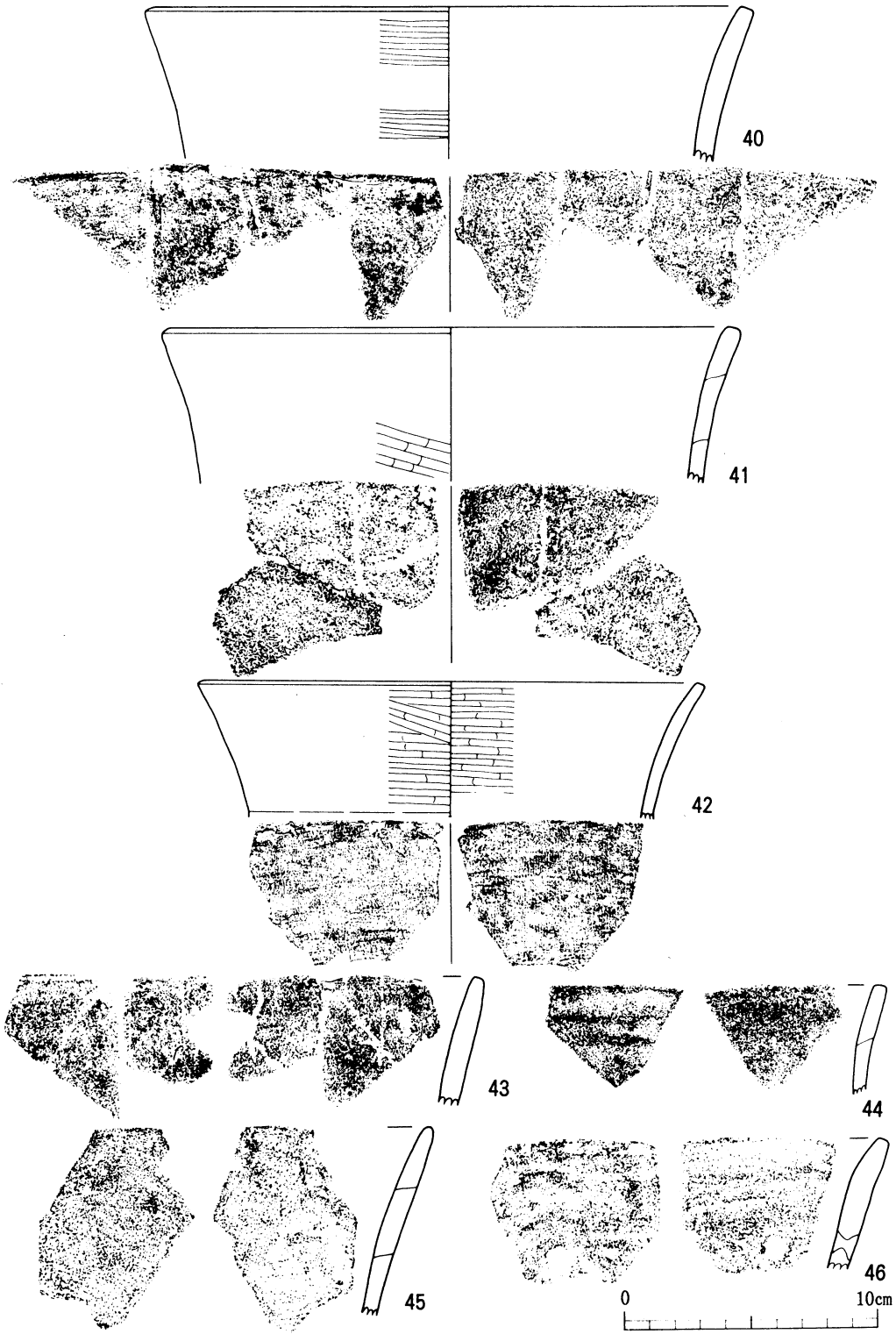
第11図 第II類(6) 深鉢2



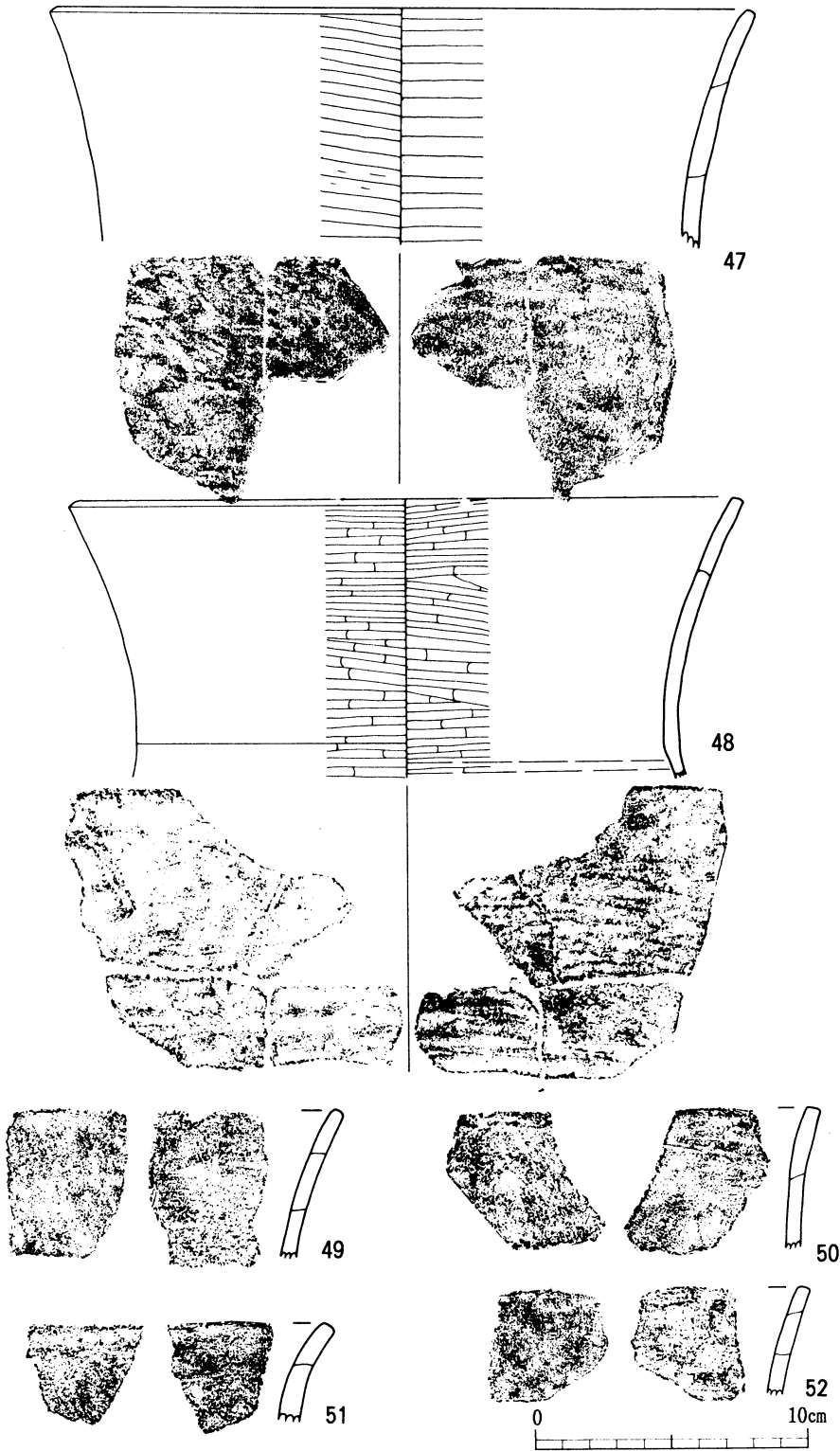
第12図 第Ⅱ類(7) 深鉢



第13図 第Ⅱ類(8) 深鉢4



第14図 第II類(9) 深鉢5



第15図 第Ⅱ類(1) 深鉢6

軽石が見られる。41は外反する土器の口縁部で、器面は荒い研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。42は外反する土器の口縁部で、器面は研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。43・44・45・46は外反する口縁部である。器面は研磨調整で、色調は灰褐色である。胎土は灰茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。この中には44のように凹線文に類似した調整痕や46のように補修孔が見られるものもある。47は外反する土器の口縁部で、器面は荒い研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。48は外反する土器の口縁部から頸部で、器面は丁寧な研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。内面の頸部から肩部は「く」の字状に削られている。49・50・51・52は外反する口縁部である。器面は研磨調整で、色調は灰褐色である。胎土は灰茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

イ B-b (53・54・55・56・57・58・59)

53から59までは口縁部の先端部が鋭く湾曲するタイプである。Bタイプでもbにあたる。この中で55・56はこのタイプの中に属さないかもしれないが、B-bの内向タイプとしての取扱いとしてこのタイプにあげた。

53は口縁部の先端部が鋭く湾曲しやや外反する口縁部である。器面は丁寧な研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。54は口縁部の先端部が鋭く湾曲し外反する口縁部である。器面は研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。55は口縁部の先端部が湾曲し内向する口縁部である。器面は研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。やや厚手である。56は口縁部の先端部が湾曲し内向する口縁部である。器面は研磨調整がされている。器面の色調は暗茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。やや薄手である。57は口縁部の先端部が湾曲しやや外反する口縁部である。器面は丁寧な研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。58は口縁部の先端部がやや鋭く湾曲し外反する口縁部である。器面は丁寧な研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。59は口縁部の先端部がやや鋭く湾曲し外反する口縁部及び頸部で、頸部が直行する。器面は丁寧な研磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が見られる。

ウ B-c (60・61・62)

このタイプは頸部で「く」の字状に折れるものである。

60は頸部で「く」の字状に折れ、外反する頸部から口縁部にかけてである。器面は丁寧な研

磨調整がされている。器面の色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。61は頸部で「く」の字状に折れる直線的に外反する土器である。器面は丁寧な研磨調整がみられる。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。62は直線的な口縁部で外反しているなのでこのタイプにいった。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。66も直線的な口縁部で外反しているなのでこのタイプにいった。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。

B-d (63・64・65)

このタイプは頸部から直行する器形である。すなはち、肩の張らないものである。

63は口唇部の内側が削られ外側で尖る形をしている。器形は寸胴タイプである。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。64は口縁部がやや外反するもので、口縁上部はやや厚みがみられる。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。65は口縁端部がやや外反するもので、直線的な寸胴の器形をしている。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。

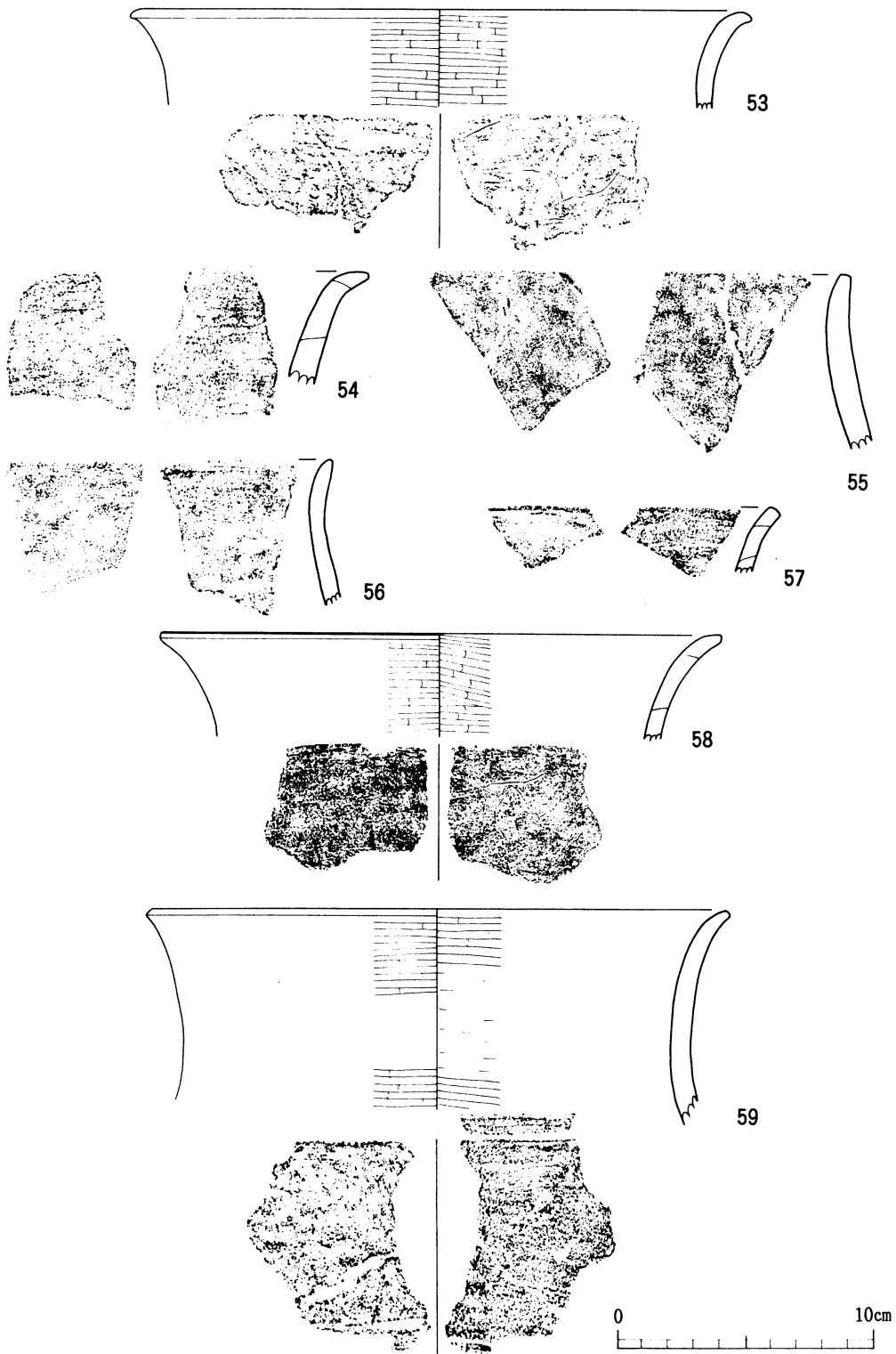
以上がBタイプの口縁部での分類である。

次はBタイプの肩部である。

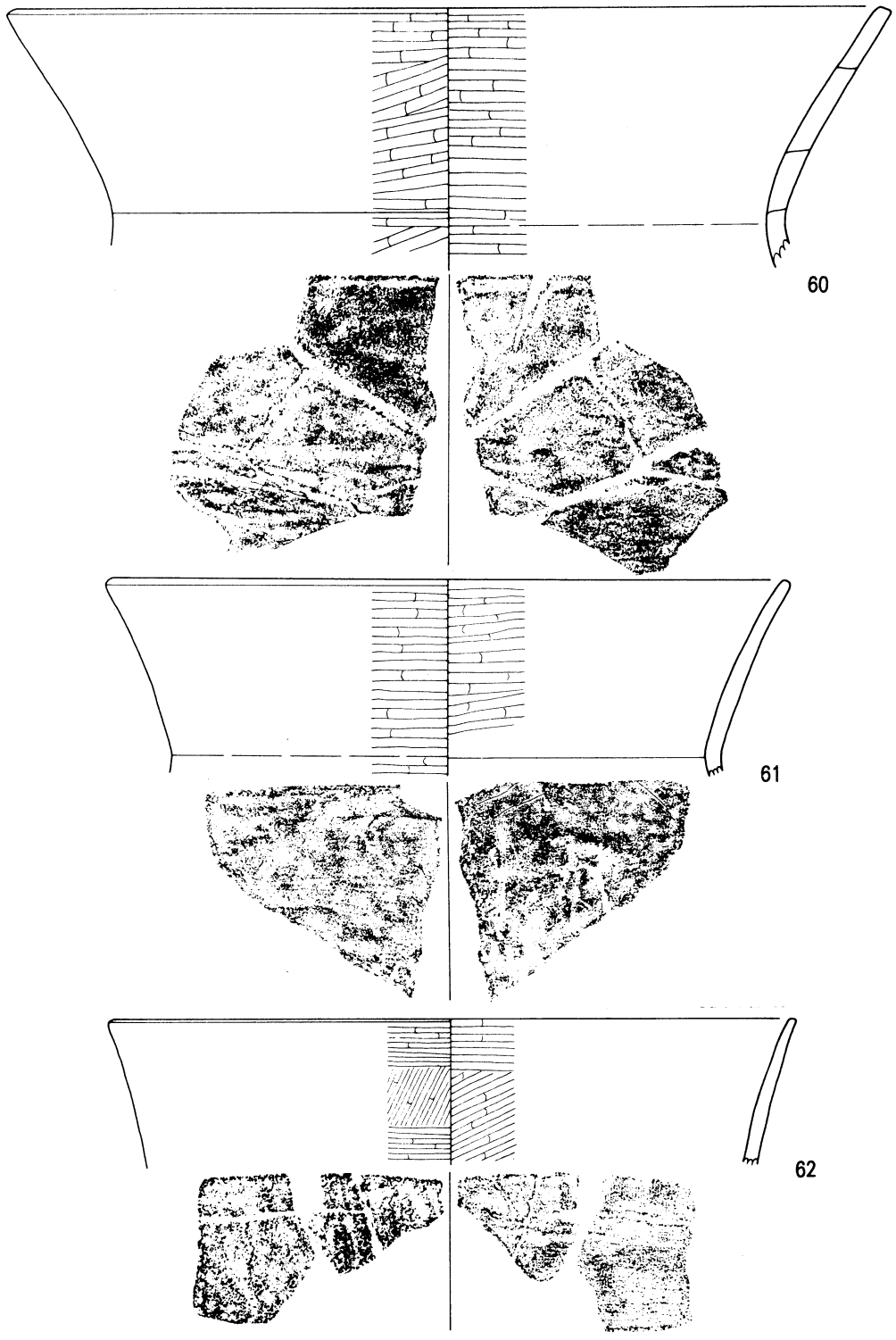
このタイプはe・fの2つに分けられる。それは肩が盛り上がるものeと撫で肩のfとに分けた。

B-f (67・78・69・70・71・72・73・74)

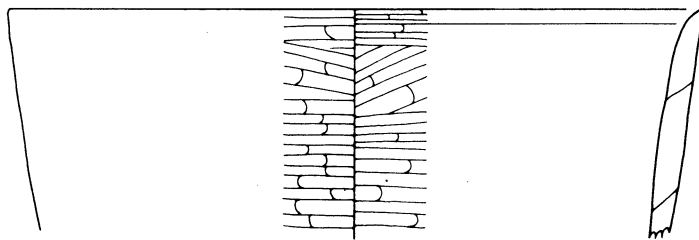
67は肩部が大きく盛り上がり、頸部は肩部から頸部中央に向かって大きく狭まっている。また、頸部と肩部の間に沈線が1本施されている。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。68は肩部が大きく盛り上がり、頸部は頸部中央に向かって狭まっている。頸部と肩部の間に沈線が1本施されている。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。69は肩部が盛り上がり、頸部は肩部から頸部に向かってやや直行しながら狭まっている。頸部と肩部の間に沈線が1本施されている。器面は研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。70は肩部が盛り上がり、頸部は頸部中央に向かって狭まっている。頸部と肩部の間に沈線が1本施されている。器面は研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。71は大型の土器である。肩部が盛り上がり、頸部は頸部中央に向かって狭まっている。頸部と肩部の間に沈線が1本施されている。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中



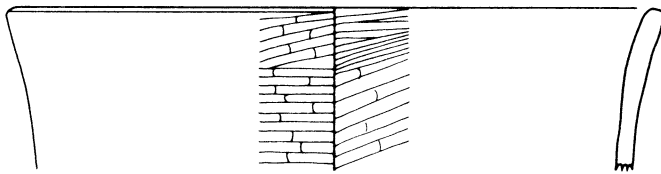
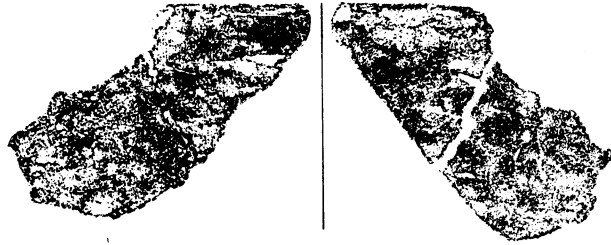
第16図 第Ⅱ類(1) 深鉢7



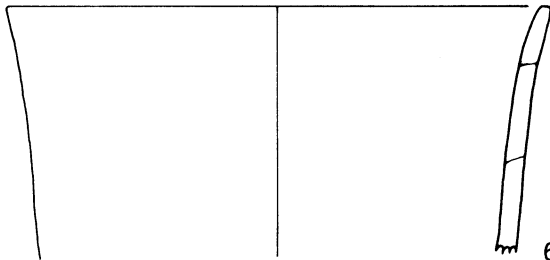
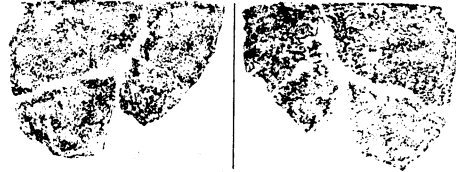
第17図 第Ⅱ類(12) 深鉢



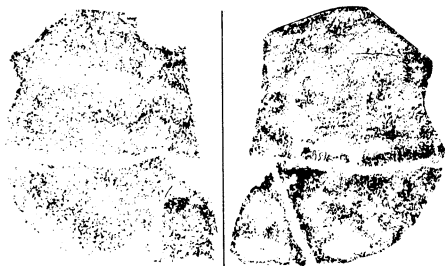
63



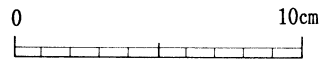
64



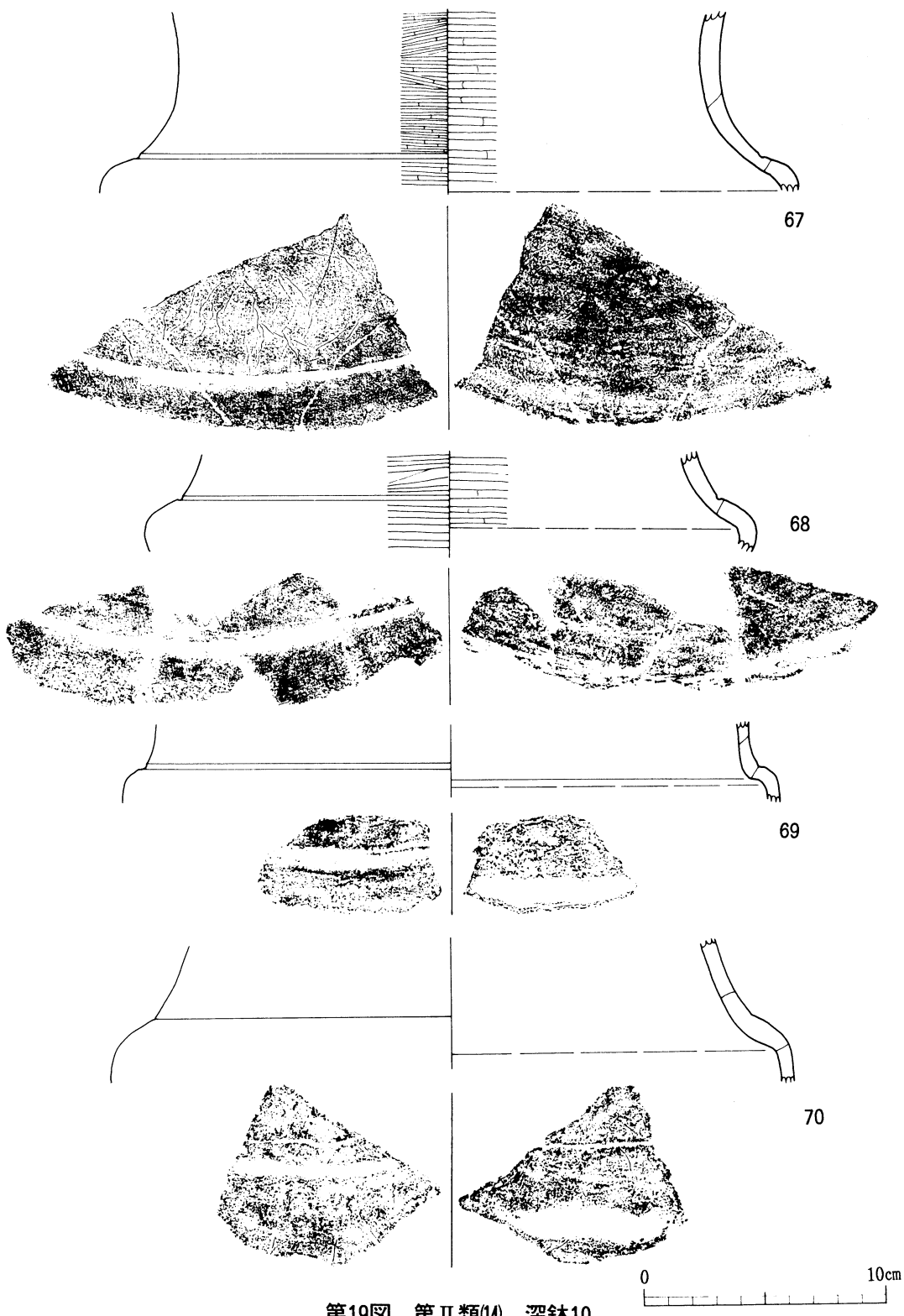
65



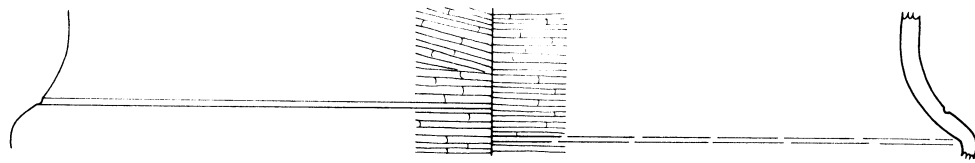
66



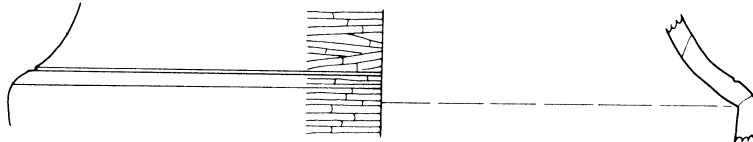
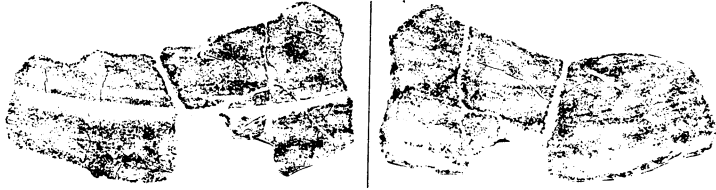
第18図 第Ⅱ類(13) 深鉢9



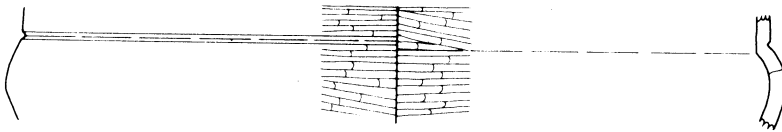
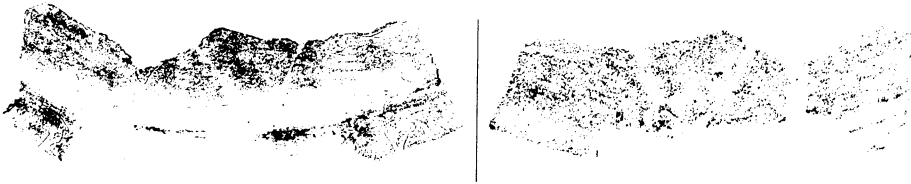
第19図 第Ⅱ類(14) 深鉢10



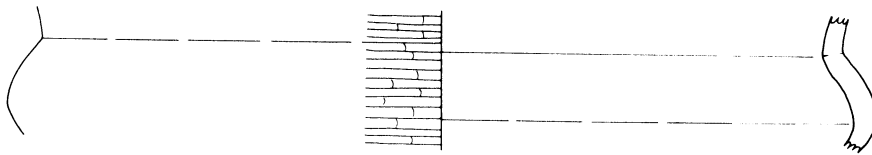
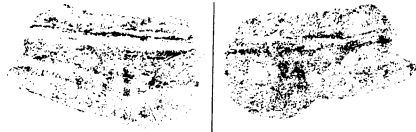
71



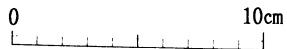
72



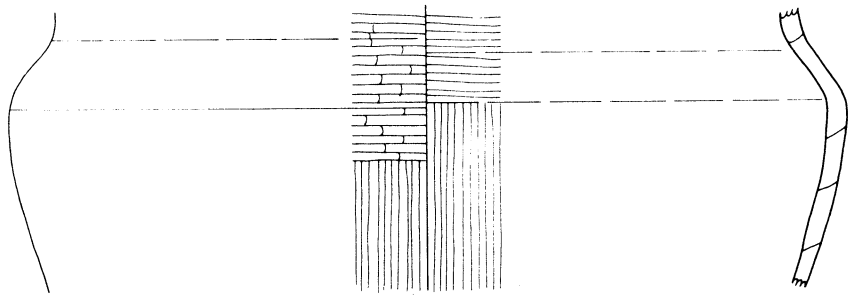
73



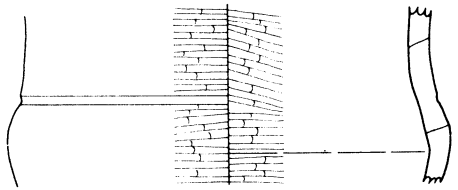
74



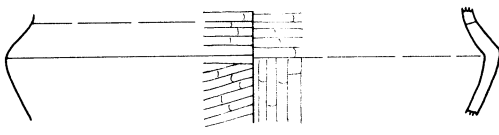
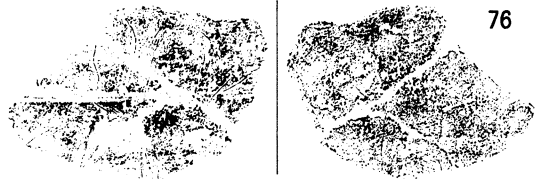
第20図 第Ⅱ類(15) 深鉢11



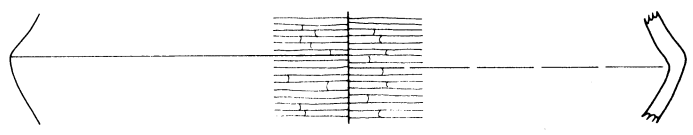
75



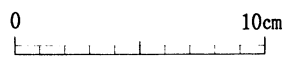
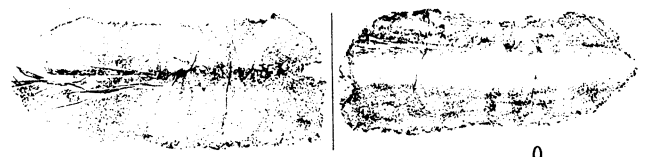
76



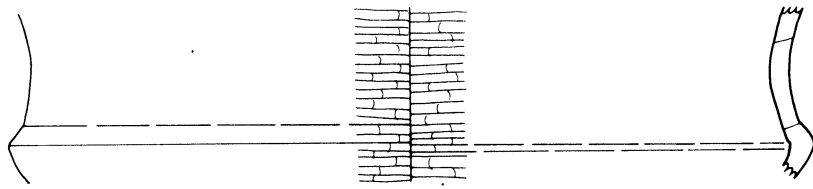
77



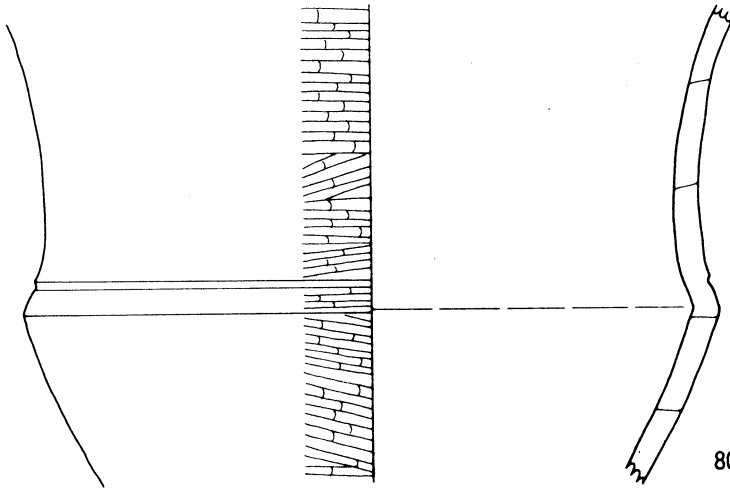
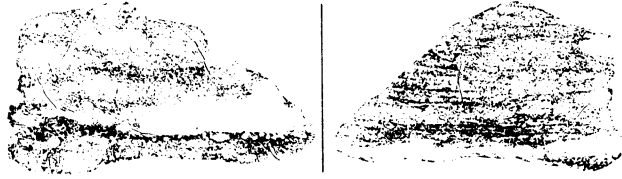
78



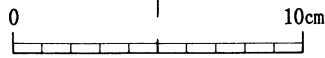
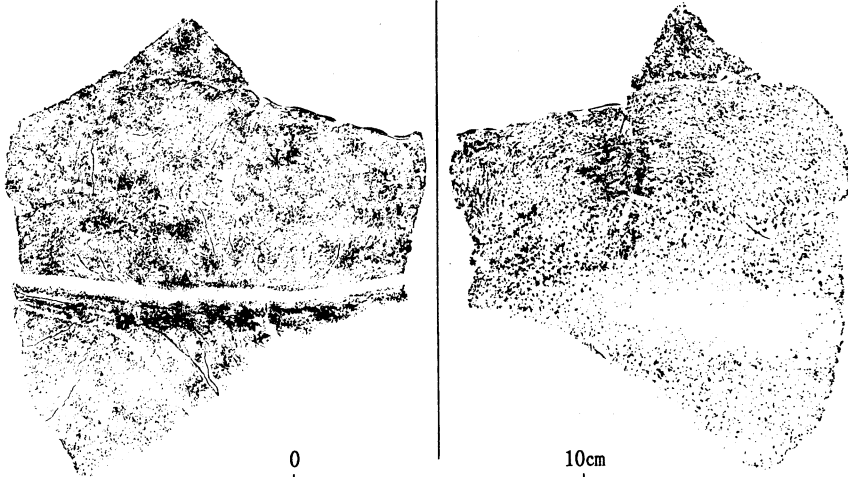
第21図 第II類(16) 深鉢12



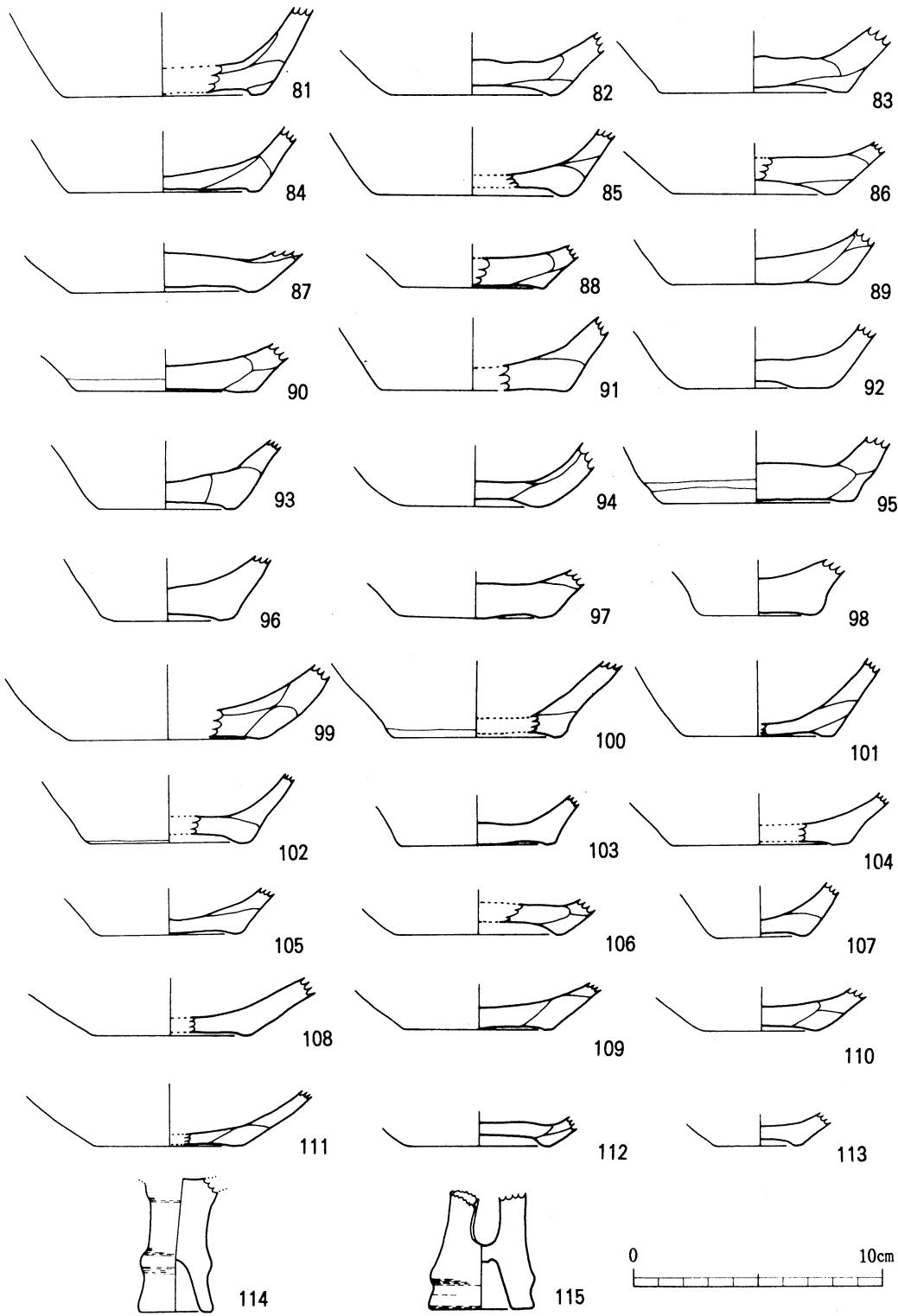
79



80



第22図 第Ⅱ類(17) 深鉢13



第23图 第II类(18) 底部

には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。72は肩部が盛り上がり、頸部は頸部中央に向かって大きく狭まっている。頸部と肩部の間に沈線が1本施されている。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。73は肩部の盛り上がりはやや欠けるが球状になった肩部の土器である。頸部は肩部から頸部に向かって直行している器形である。頸部と肩部の間には沈線が1本施されている。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。74も肩部の盛り上がりはやや欠けるが球状になった肩部の土器である。頸部は肩部から頸部に向かって外反している器形である。頸部と肩部の間には段の罫線が1本施されている。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。

B-f (75・76・77・78・79・80)

このタイプは撫で肩の類である。

75は大型の土器である。肩部が撫で肩で、頸部は頸部中央に向かって狭まっている。頸部と肩部の間に段の罫線が1本施されている。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。76は小型の土器である。肩部が撫で肩で、頸部は頸部中央に向かって狭まり直行している。頸部と肩部の間に沈線が1本施されている。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。77は肩部が「く」の字状に張った撫で肩で小型の土器である。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は明茶褐色である。胎土は灰茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。78は肩部が「く」の字状に張った撫で肩である。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は明茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。79はeタイプにも属しても良い器形であるが、肩の角度から「く」の字に近いのでfタイプに含めた。肩部はやや盛り上がり我みられるもので、器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。80は肩部が「く」の字状に折れ、頸部は頸部中央に向かって狭まり湾曲している土器である。頸部と肩部の間には沈線が1本施されている。器面は丁寧な研磨調整がみられ、色調は灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。

③ 底部 (81~115)

ア 深鉢の底部 (81~110)

全体的に中央部が接地しない上げ底である。真下から見るとドーナツ状に見える。

81から98は厚手の底部である。その中で96・98が径の狭いもので、厚みがより厚い土器である。また、92・94は丸身がある土器である。色調は全体的に灰茶褐色である。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている

100~110は薄手の底部である。この中には浅鉢に属するものも含まれていると思われるが判

断は難しい。見方によっては浅鉢に属するかもしれない。これらの特徴は大きく開き薄手で丁寧な研磨調整である。器形は上げ底である。器面の色調は灰茶褐色から暗茶褐色で、胎土は黒茶褐色である。

イ 浅鉢 (111~113)

浅鉢の底部と言えるものは3点である。特徴は深鉢よりも薄くて丁寧な研磨調整がある。器形は上げ底である。器面の色調は灰茶褐色から暗茶褐色で、胎土は黒茶褐色である。

ウ 特殊土器片底部 (114~115)

脚部か取っ手か不明の土器である。114は筒状のものでえぐり込みがある。この土器は器の内側までであるものである。色調は茶褐色をしている。器の接着部と中央部に帯状の膨らみをもつ。胎土は黒茶褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。115は筒状のものでえぐり込みがある。器面は丁寧な研磨調整で、色調は黒褐色をしている。器の接着部には透かしがあり、外端部に帯状の膨らみをもつ。胎土は黒褐色で、中には石英・長石・角閃石・軽石が含まれている。

3. 第Ⅲ類—縄文晩期 (117・118)

117は黒色研磨土器の浅鉢である。口縁端部は玉縁状で外反した土器である。器面は黒色で丁寧な研磨調整が両面とも施されている。胎土は黒褐色で、中には石英・長石・角閃石がみられる。118は深鉢の底部である。底面は平坦で張り出しがみられる。器面の色調は茶褐色で、荒い器面調整である。胎土は茶褐色で、中には石英・長石・角閃石がみられる。

4. 第Ⅳ類—弥生前期 (119)

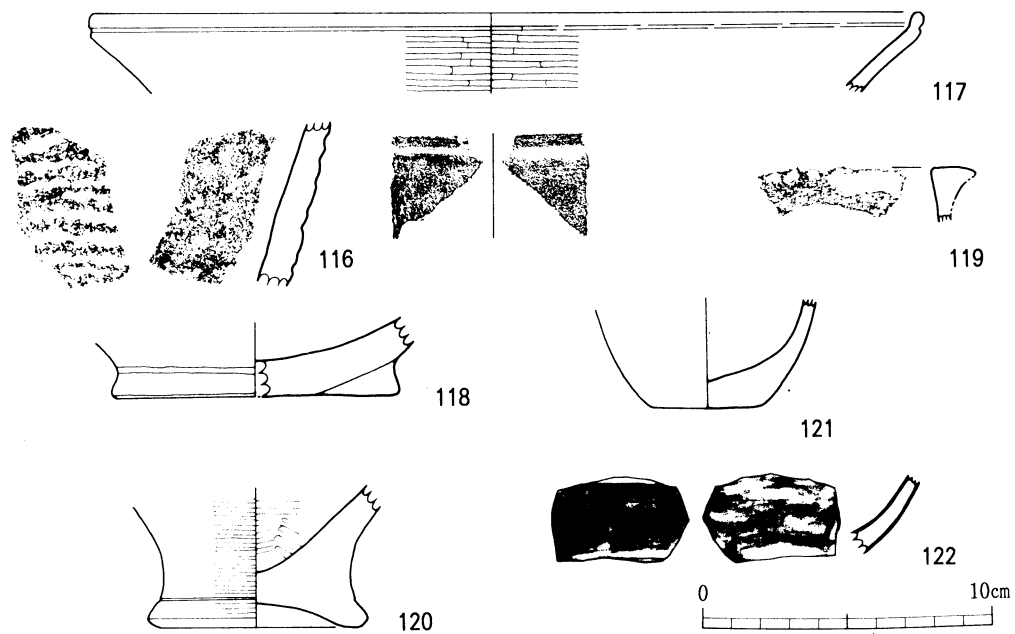
この土器は断面三角口縁で外端部に刻目がみられる。器面は燈茶褐色で、胎土は明茶褐色である。

5. 第Ⅴ類—古墳期 (120・121)

120は甕形土器の底部である。背の低い脚台風で上げ底である。器面は丁寧な撫で調整で横位にしている。胎土及び器面の色調は明茶褐色である。

6. 第Ⅵ類—近世 (122)

これは陶器で、器面には鉄釉が見られる。さつま焼きの黒さつまと思われる。器形は茶家の胴部と思われる。



第24図 第I IIIIVV類の土器と陶器

第IV章 ま と め

本遺跡では、第Ⅰ類が縄文早期の押型文土器で、第Ⅱ類が縄文後期の三万田式土器で、第Ⅲ類が縄文晩期初頭の土器で、第Ⅳ類が弥生前期初頭の土器で、第Ⅴ類が古墳時代の土器で、第Ⅵ類が近世の江戸期の陶器である。

本遺跡の特徴は、縄文後期の三万田式土器が主体で、浅鉢、深鉢のセット関係が見られたことが一つの成果である。

浅鉢は凹線文を施すもので、凹線文が多いものと、少ないものが出土している。これらは、若干器形異なっている。前者は口縁が大きく外反し、後者は口縁部が立っている。

深鉢は凹線文を施すもの（有文）と施さないもの（無文）が出土している。

有文の口縁と肩部は三万田式土器の典型的なものと言えよう。そして、浅鉢の凹線文とのセット関係が成り立つことが理解できる。

問題は無文である。熊本県の御領貝塚では御領式土器のセットとして、有文と無文を上げている。御領式土器の有文は三万田式土器の有文と比べると沈線文と凹線文との違いがあるが、無文では口縁の形において、御領式土器と大した違いがない。ここでは御領式土器の有文土器が出土していないので、この時期でも有文と無文があったと解釈できる

また、本遺跡では口縁部と肩部がつながったものは少ないが、肩部が盛り上がったものと、盛り上がらずに「く」字状に折れるものの2種類がある。御領貝塚では肩部が盛り上がったものよりも「く」字状に折れるものが主体となって出土しているので本遺跡の后者は御領式土器に近いと解釈できる。よって、前者は三万田式土器の無文の土器と考えて良い。これは、浅鉢の凹線文が多いものと、少ないものとの関係に類似している。

よって、本遺跡の第Ⅱ類は2時期に分けられる。

また、三万田式土器特有に羽状文が出土していないのも特徴である。

これらを総合すると、本遺跡は御領式土器の時期に近い三万田式土器の時期の遺跡と考えられ、遺物は本来の三万田式土器と御領式土器に近い形式が出土している。

参考文献

- | | | |
|---------|----------|---------|
| 日本の考古学 | 縄文時代九州地方 | 乙 益 重 隆 |
| 日本考古学講座 | 九州地方縄文晩期 | 賀 川 光 夫 |
| 熊本県御領貝塚 | 石器時代8号 | 坪 井 清 足 |



中里遺跡の近景



中里遺跡調査風景



中里遺跡のトレンチ

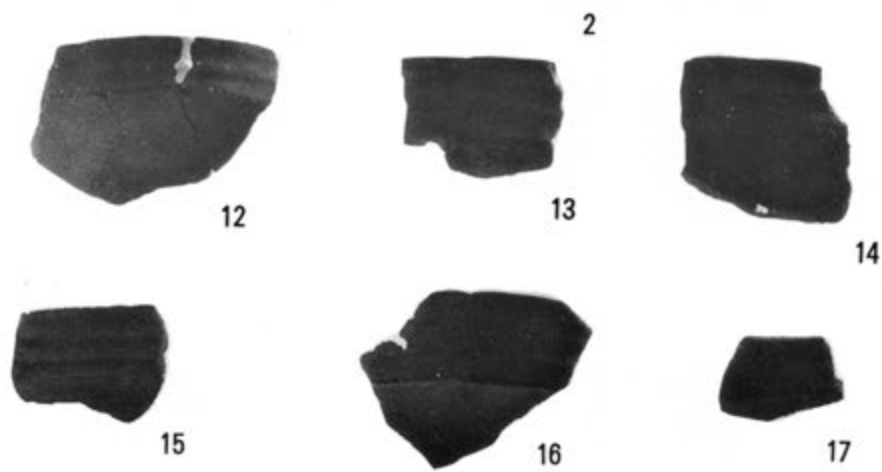
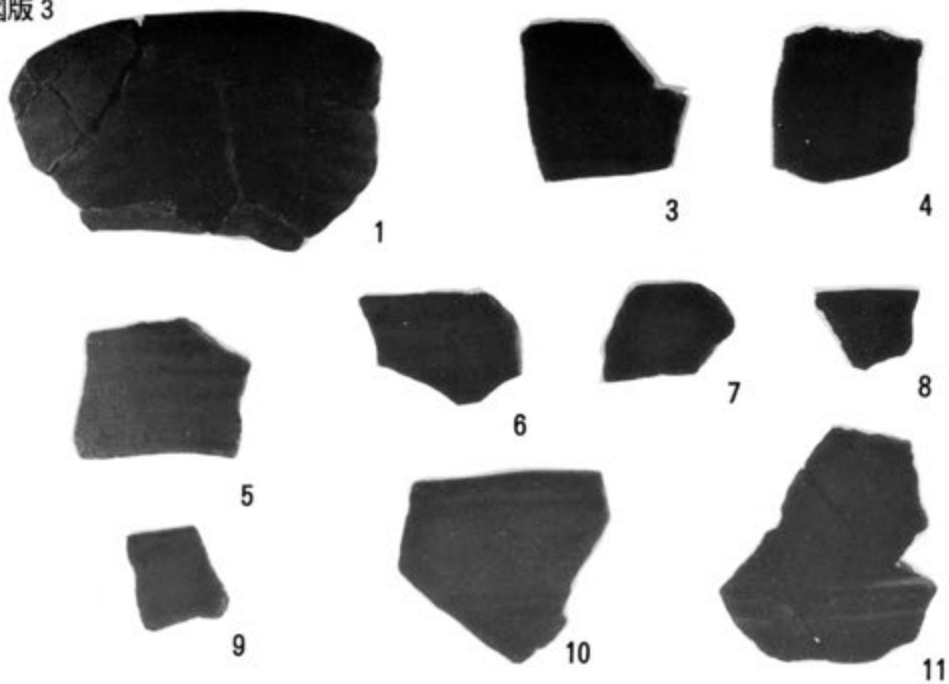


第1トレンチ

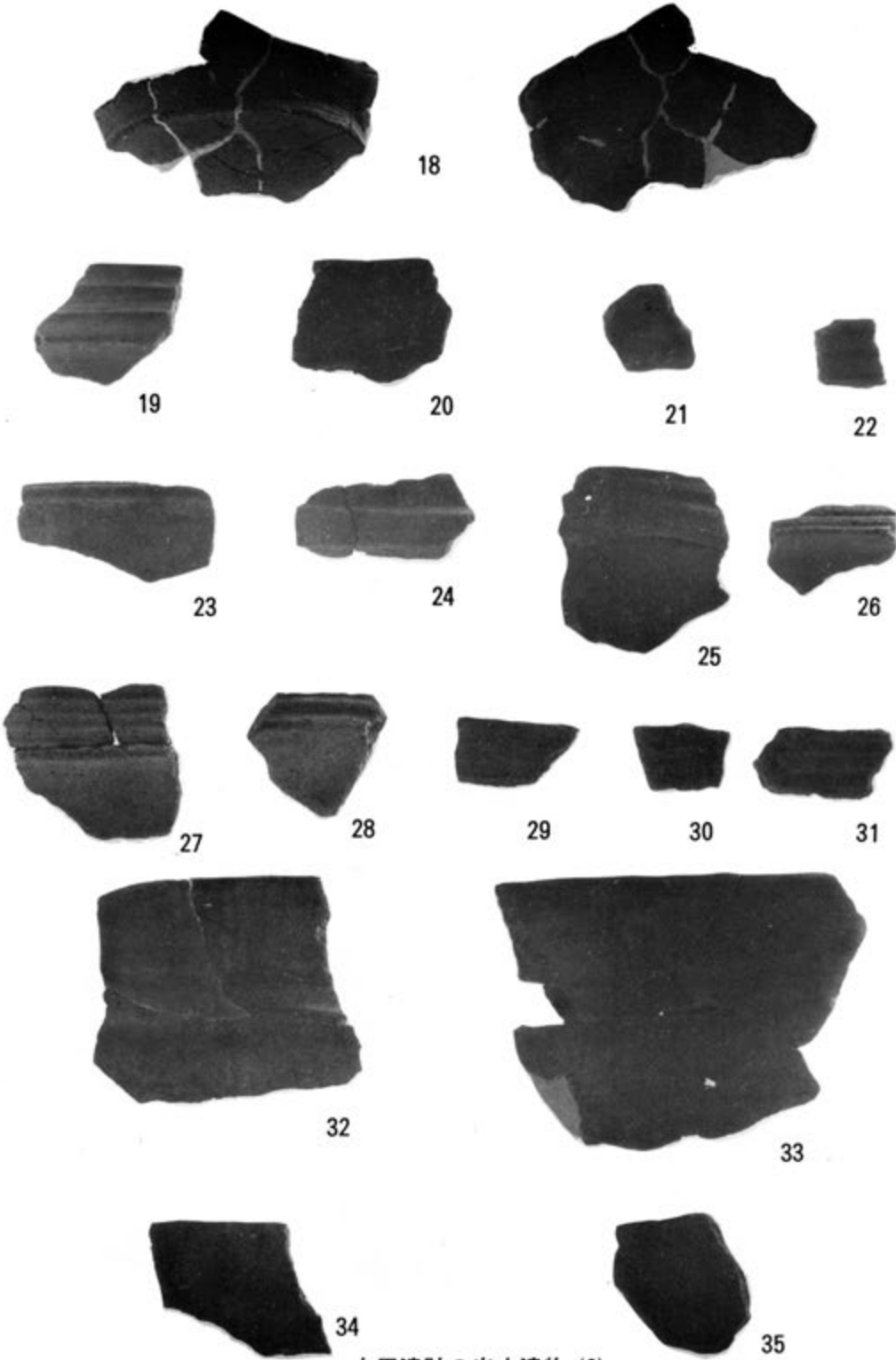


中里遺跡の土層

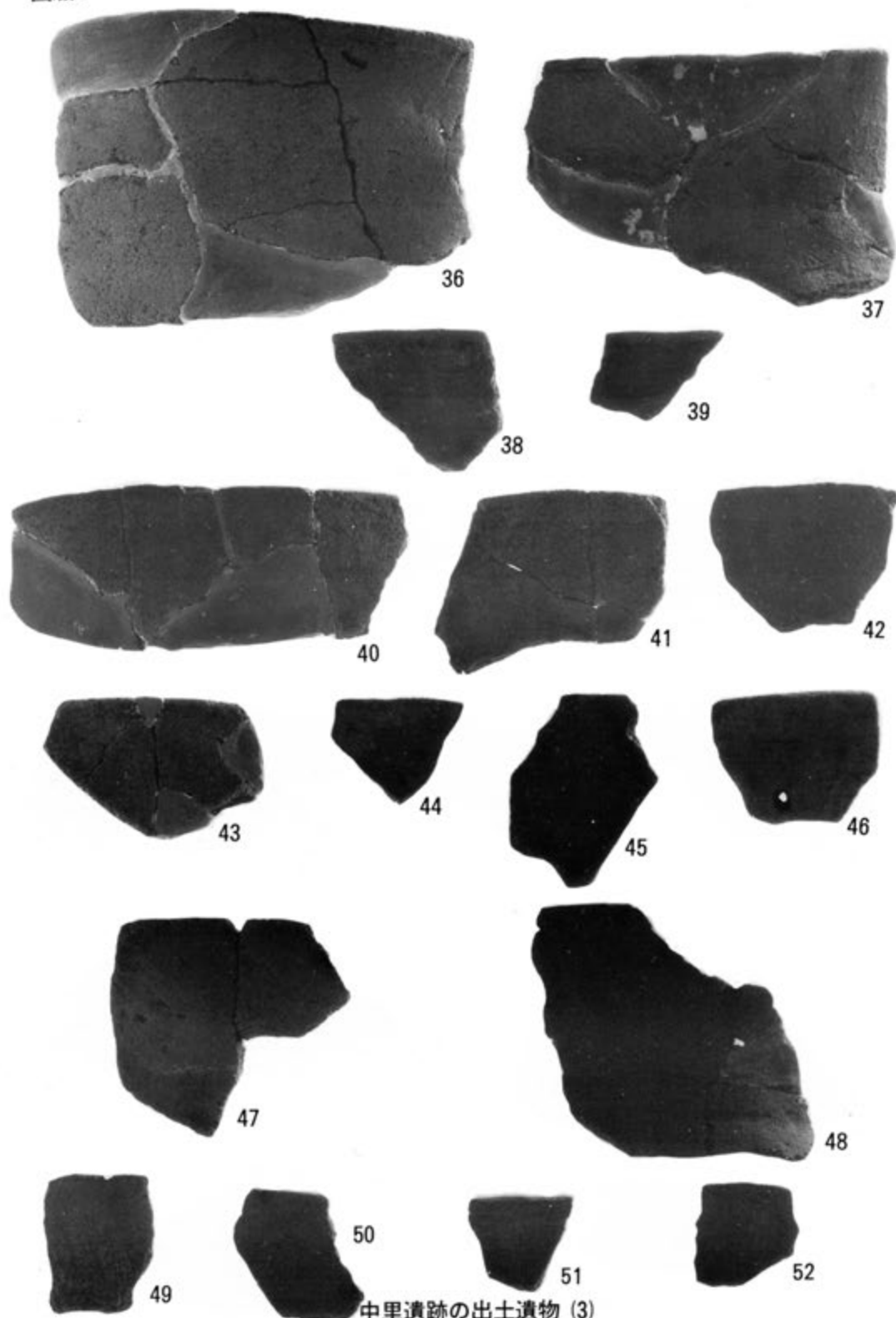
図版 3



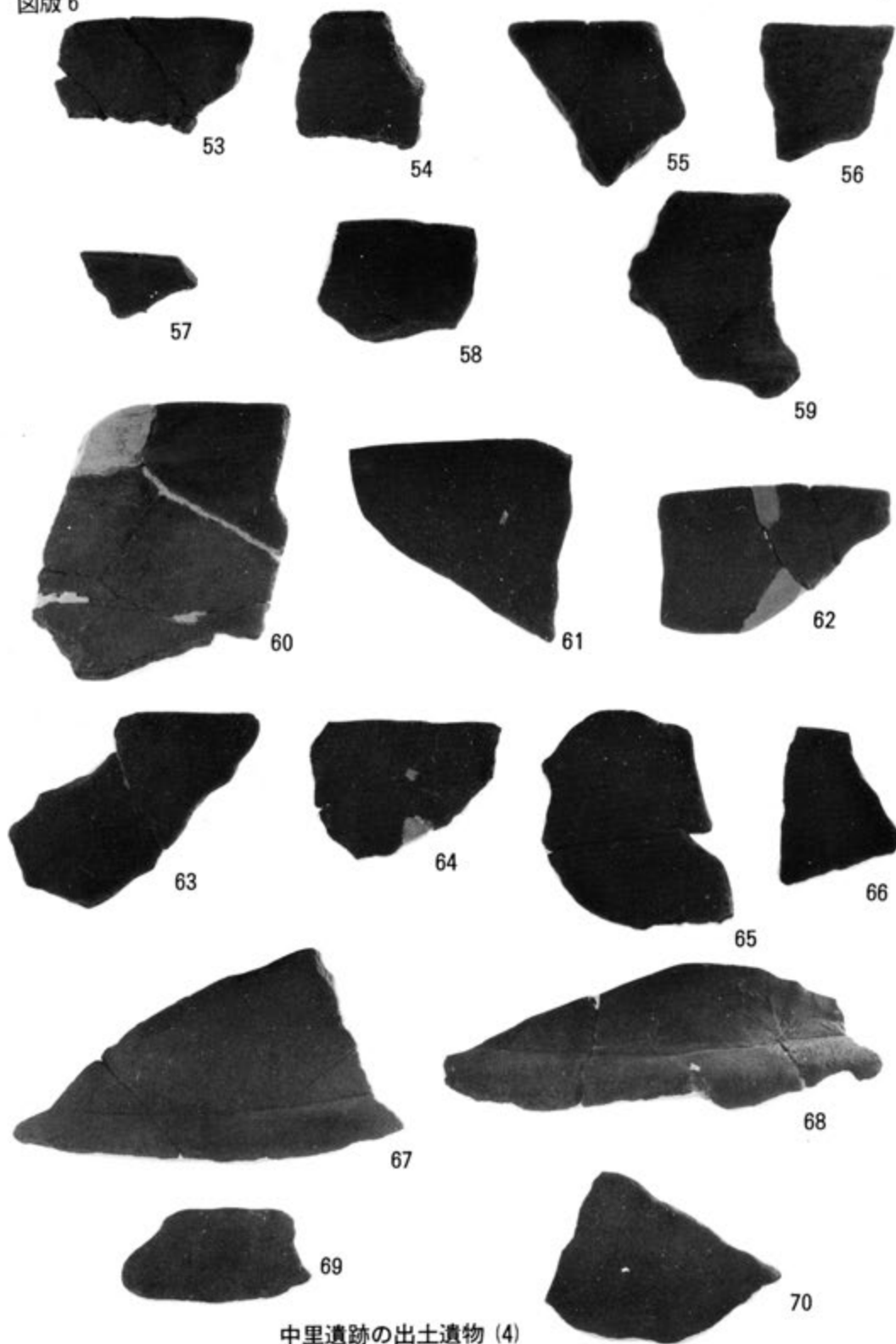
中里遺跡の出土遺物 (1)



中里遺跡の出土遺物 (2)

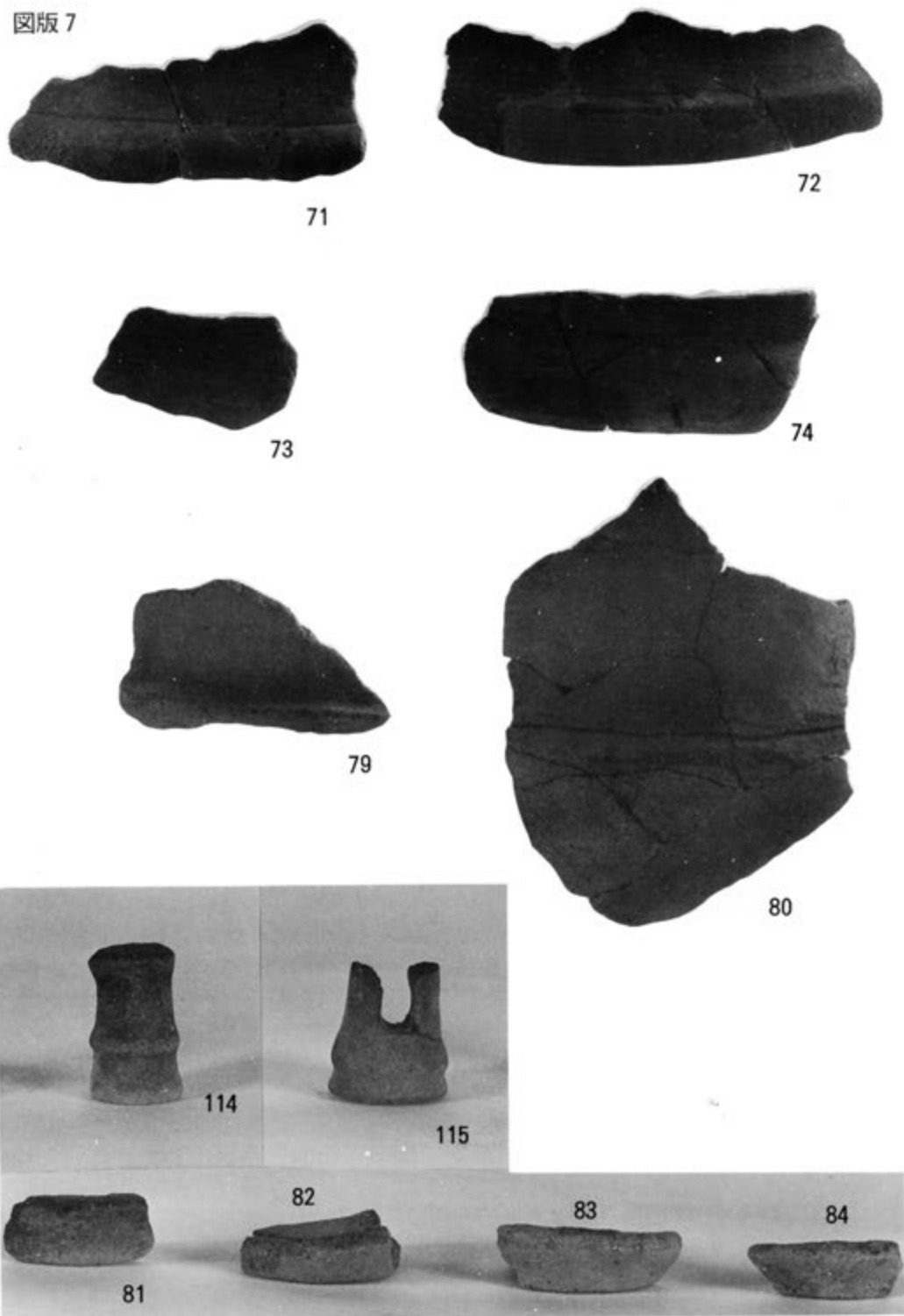


中里遺跡の出土遺物 (3)



中里遺跡の出土遺物 (4)

図版 7



中里遺跡の出土遺物 (5)

図版 8



85

86

87

88



89

90

91

92



93

94

95

96

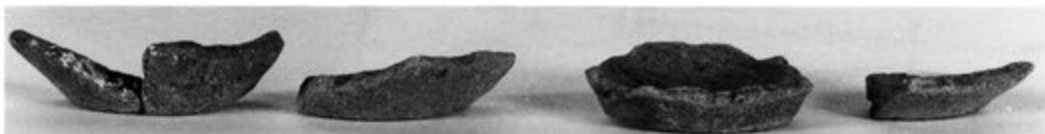


97

98

99

100

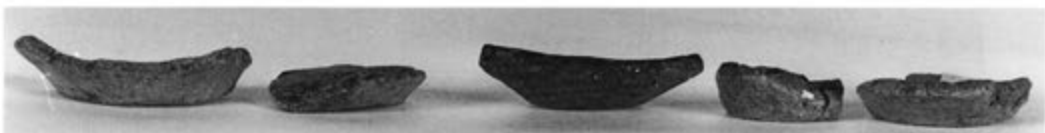


101

102

103

104



105

106

108

107

109



110

111

112

113

中里遺跡の出土遺物 (6)